

色昔の事を思ひ出して、實に懷舊の感に堪へなかつた。

一夜月に乗じて大濱にも納涼に出て見た。月も海も風も昔の夏の夜に其儘であつた。母は月の濱に立つて海を見渡し、いかにも懷舊の情に堪へぬものゝ如く、

「ア、三郎さん幾年前の事でしたらうな？ お前が始めて安治川丸に乗つて行く時、何でも寒い晩方の事であつたが、私は菊代を伴れて此の濱に来て、餘所ながらお前を見送つて泣いた事を覚えて居ります！」

その頃の事を思ひ出すと、三郎も實に懷舊の感に堪へなかつた。母子は三日目に堺を去つて大阪に來た。それから葭江は三郎と一緒に三十幾年振で故郷郡山に來て見たが、まるで様子が變つて了つて、何處が何うであつたやら、少しも見當が附かなかつた。祖先の菩提寺を尋ねて見たが、寺は焼けて建て變り、位牌一ツ残つても居なかつた。

奈良を経て京都に廻り、二日滞在して三郎は母に京都見物をさせた。歸りに伊豆の修禪寺に寄り、此處で一週間湯治をさせて、八月の月末に母子は葭子を伴れて東京に歸つて來た。

### (五十三) 母の臨終

この年の十月に土肥家先祖代々のを始め、亡父彦七郎のも又亡二兄の石碑も立派に出來たので、三郎は染井に二十坪許の墓地を買つて、この夏泉州からお供をして來たお骨を此處に改葬し、同時に先祖を始め亡父以下の年忌供養を營んだ。

「ア、有がたい有がたい、これで最う三郎さん、私は何にも此の世に心残はないよ」  
母は非常に喜んだ。佛事供養を營んだ後は誰も何となく心持の好いもので、三郎もこれで大きに安心した。

十月は何事も無く過ぎた。月は既に十一月に入り、人は兎角風を引き易い時節に成ると、葭江も風の心地で床に就いた。三郎は此の日も出勤して居つたが、愛子は直に醫者を呼び、菊代の許にも態知らせた。

丁度醫者の來て居る所に菊代も急いで見舞に來た。醫者は極めて軽く言つた。

「ナニお風邪でございませう」

菊代も安心して歸つた。併し葭江は今度は何うしても起きられなかつた。醫者は毎日來て見て居つ

た。菊代夫婦も日曜日に小供を連れて見舞に來た。三郎は今日は朝から家に居た。この日も病人は大して病いっうにも見受けなかつた。葎江は皆の居る傍で言つた。

「私は別に何處が何う病いとも覺えぬが、今度は何うやら最う皆さんにお暇らしい！何うも長々お世話さまに成りまして有がたうございました！厚くお禮を申しあげますよ」

皆驚いて色々力を附けて見た。併し病人は得心しなかつた。

「お蔭さまで私は既う、何から何まで私の任務を果させて頂きました！小供も兄弟とも立派に育ち皆それ／＼善い人達に添ひ合せ、孫も早二人宛顔を見させて頂きました！最う私は居なくても、後に何にも差支はありません！ア、實に結構な生涯を送らせて頂きました。餘りに勿體なくて、彼方にお禮の申しやうがありません！」

言つて一心に念佛を申し、

「假令私の病氣が重くならうと、三郎さん始め、皆決して案じて下さるなよ。私はこれで最う私の任務を果させて頂いて、如來さまのお膝元に歸らせて頂くのです。斯んな喜ばしい事がありますか。何うか決して歎いて下さるなよ。人間の命數は皆各自に定つて居ります。我が任務の了つた時は、我が頂いて來た命數の了つた時です。我が頂いて來た丈の任務を未だ終らせて頂かぬ中は、家のお父さ

まの死際に仰せられたやうに、假令何んな危い目に遭はうと、また假令何んな大病をしようとも、決して死ぬる氣遣は無いが、最う我が頂いて來た丈の任務を果させて頂いたとなると、即ち我が定命の盡きた時は、如何なる名醫の手にかゝらうとも、決して一日半時も生き延びられるものではない！一座の人も同じ事、何時何んな大病に罹らうとも皆決して怖れなさんなよ。今もお話をした通り、我が頂いて來た丈の任務を果させて頂かぬ中は、何んな事があつても決して死ぬるものではない！然の代りに皆胸を据ゑてお居でなさいよ。我が頂いて來た丈の任務を果させて頂いた時は、いかに此の世に心を残して見ても最ういかん！我が死は既に近附いた時である。人の生身は弱いもの。無常の風は今吹いて來ぬとも限らぬ？如來さまの御本願にお縋り申して居らうならば、何時眼を閉ぢやうと安心なものだ！この心がけは片時も忘れぬやうにして、正直に其の日／＼の任務を男は男、女は女でお盡しなさい！私は六十年來私の長い生涯に試して來ました。人間は此の外には如何に探し求めても進むべき道は無い！ア、有がたい有がたい！私はこれで最う結構な所に歸らせて頂きます！若し此の世の事に執着して居つて、人間には何時か一度は必ず死と云ふものゝある事を知らずに居つたならば、私は此際定めて慌てる事でありませうが、ア、有がたい私は兼て如來さまの御本願をお聞かせに預つて居りました！何時何う成らうとも少しも恐れぬ用意を早くして置いて、皆この世を大切に勤めな

さいよ。私の言ひ置く事はこれより外には何にも無い！』

言つて此の夜は安らかに眠つた。明くる日も差して變りは無いやうであつた。すると一同は驚いた。その後三日目の夕方に丁度醫者の來て居る時、何だか容體が變に成つた。急報に接して菊代夫婦も直に駈着けた。それが僅に間に合つて、病人は口の中で念佛を唱へ、六十二歳を一期として、誠に安らかに、いかにも穩に、宛も春の日の暮れるがやうに目を閉ぢて、靜に最後の息を引いた。

親の死んだのに泣かぬと言つては怪しいが、その臨終の餘りなる立派さに、三郎始め唯感歎して、おぼえず敬虔の念を發し、一同期せず手を合せ、皆一心に念佛を唱へつゝ母の死を送つたのは、誰にも何だか夢のやうな心地がした。

(五十四) 良 妻

切めては最う四五年もと母に望んだ三郎の願ひは遂に空しく成つた。三郎は暴に母を亡つて、太く力を落したが、最う此の上はと思ひかへして、厚く死後を用ひながら益々奮つて働いて居つた。

愛子は善く夫に事へて家事に當つた。三郎は妻に満足し、愛子は夫と同化して、夫婦の間に常に精

神の共通を有し、夫婦は何處までも同心同體の人として、日常事に當つて居つた。

母の死後は家に何等の故障も無かつた。夫婦は益々世上の總てに圓熟して、平和な月日を送つて居つた。この間に二年の歲月は愉快に過ぎて、小供も無事に生ひ立つて、姉は六ツに成り、弟は三ツに成つた。

三郎は前途に益々希望の光を認めて勇んだ。愛子は夫を慰め勵まし、日々愉快に人生の戦線に立しめた。夫婦の運命には今や段々暖い春の光が映して來た。

「此處だ、人間は此處を取逃しちやいかん！」

三郎は下腹に力を入れた。

「良人！」

妻は渾身愛の人と成つて、夫の立身の戦闘に應援した。

この應援が三郎には、少なからぬ慰藉となり又勇氣と成つた。三郎は元來奮闘的人物である所に持つて來て、妻の内助が誠に能く届いたので、彼は益々勇敢に奮戦したが、我が運命の段々發展するに連れて、三郎は妻の内助を益々要求するやうに成り、愛子は又夫の要求に十分應じて、能く其の任務を盡したので、愛子は三郎に取つて空氣よりも日光よりも水よりも大切な物に成り、彼の女無しには

一日も立行かぬやうな状態に成つて来た。

愛子は夫の犠牲と成る事を厭はなかつた。我が生涯を共にする夫の爲とあるならば、我が温かい肉を殺いでも差支へぬ。我が温かい血を搾つても厭はない。何うか日々少しでも夫の爲にと氣を張つて何時でも夫の保護者と成つて立つて居た。人は皆三郎の幸福を羨んで、

「良い細君だ、彼んな妻があれば、誰でも確り戦が出来る！」

愛子を褒めぬ者は無かつた。

月日の経つは早いものだ。今年の十一月十日は、既に姑の三周忌に當つた。愛子は夫を助けて妹夫婦や、坂本家の夫婦などを招いて、最も懇切に死者の三周忌の法會を家で營んだ。

それで先づ三郎夫婦は安心した。十一月は事なく済んで、明ければ早極月に入つた。極月も早段々と日の詰まるに従つて、三郎は一つの身體では引足らぬやうに忙しく成つた。愛子も毎日全力を擧げて働いて居つたが、今年は何うしたのか極月に入つて、はや二三度も風を引いた。

何處の家でも同じ事、不斷でも眞面目に働く主婦は身體の忙しいもの、殊に極月は爲すべき事が極めて多い。愛子は押して毎日家事に力めて居つた。

けれども最後に引添へた寒冒は中々頑強で、太く愛子を苦しめた。暮の二十四五日過ぎに成ると

咳嗽が段々烈しく出て来て、その度毎に胸が痛んだ。一寸醫者に見て貰はうかとも思つたが、押詰つて醫者など呼んでは夫の勇氣の打撃になる。ナニ今に治るだらうと我慢した。

暮の二十八日の夜であつた。夫は十二時過ぎに歸つて見ると、愛子は不斷に變らぬ笑顔を見せて、

「ア、お歸り遊ばせ、嘘お寒うございましたでせう？」

夫を撫恤る間にも、咳嗽は我慢仕切れなかつた。三郎は心配して、

「オイ大變咳嗽をするぢや無いか。早く醫者に診て貰はんといかんぞ！」

「ナニ風邪でございます。お薬は頂いて居ります」

この夜も亦太く寒かつた。

(五十五) 愛 と 愛

何しろ年末の事であるので、愛子は勵めて氣を張つて居つたが、何と無く氣分は勝れなかつた。

暮は到頭押通した。新年に成ると、元日早々から太く氣分が勝れなかつた。咳嗽は益々出る、身體は置所の無いやうにだるい。それに此節は何うしたのか、夜分は太く寢汗をかくやうに成つた。

愛と愛  
「若し重く成つては困る、一度醫者に診て貰はうか」

愛子は再び斯う思つたが、

「新年勿々から醫者にかゝるのも面白くない！切めて松飾でも取れたならば……」

また躊躇して居ると、夫三郎は會社の用事で、六日の夜の夜行列車で急に大阪まで行かねば成らん事に成つた。立つに臨んで三郎は愛子の病氣を連りに苦し、

「何うも咳嗽が止まらんやうだ。それに何だか顔色も好くない。是非醫者に診て貰はねばいかん！

今お前に病はれでもすると、私は活動が出来んぢや無いか。今夜にも是非醫者に診て貰ふが宜い！」

愛子は笑つた。

「ぢやア直に診て頂きますから、何うか御心配なくお出かけ下さいまし！私は家に暖にして居ります

から大丈夫ですが、良人何うか毛布でも最う一枚。お寒い時でございますからね……」

「ナニ吾の身體は大丈夫だ！お前の温い愛情が、吾の精神を始終保護して温めて居てくれるではないか」

愛子は嫣然笑つて見せて、

「ぢやア私だつて同じ事ぢやありませんか。私は誰の愛に生きて居るのでせう？」

言ひ／＼外套を被せて遣り、凝然と夫の手を握つて、

「ぢやアお風を召さないやうに行つてらつしやいませよ。お留守中の事は何にも御心配なくね！」

「ぢやア屹度醫者に診て貰ひなさいよ。明日は菊代も来る事に成つて居る」

「オヤ左様でございますか。私はまだ御年始にも伺はないで……」

三郎は出て行つた。愛子は門まで見送つた。家に入ると気分が悪くて、最う我慢にも起きて居られなく成つた。急いで女中に床を延べて貰つて、枕に就かうとすると、急に烈しく咳嗽込んで、口からタラ／＼血が流れた。

「ア、奥さま！」

女中は驚いて白紙を持つて来た。愛子は自分で拭き取つて、

「餘り咳嗽が続いたんで咽喉でも破れたと見えるね……」

この夜は太く熱が出て、小供も抱いて寝られなかつた。氷嚢を當て居ると、明方から熱も下り、うつら／＼と寝入つたが、翌朝は全身が綿のやうに疲れ切つて、中々起きられる所の話で無かつた。昨夜醫者を呼びに遣つたが、醫者は生憎留守であつた。醫者は坂本家に長く出入して居る人であつたので、三郎とも自然懇意にして居つた。翌朝早速遣つて来て丁寧に診察し、

「咽喉と肋膜が少しお悪いやうです。成るべくお身体をお動かし成さらないやうに成さつて、暖に寝て居らして、それから滋養物をお取りに成る事が必要です」

「何うも有がたうございます」

醫者は猶色々注意を與へて居る所に、昨日兄から頼まれて居たので、菊代は今朝早く見舞に來た。醫者を送つて玄関に出て、内々容體を聞いて見ると、醫者は實際の症狀を明し、手當の方法も精しく教へて、御當人にはまあ暫くと注意した。菊代はハツと思つたが、萬事は兄の歸るまでと、苦痛を胸に秘して居た。

三郎の用向は意外に手間取つて、丁度十日目の夜に歸つて來た。車を下りて家に入ると、女中と菊代が出て迎へた。そんな事とは知らぬので、

「ア、菊代お在るか、姉さんは？」

「少しお加減がお悪く居らツしやいましてね……」

「ア、左様か」

帽子を脱りながら三郎は様子を聞いて驚いた。また我が最愛の妻の顔の見えぬのに、何だか太く物淋しくも思つた。

(五十六) 肺 結 核

三郎は其儘奥に入つて見ると、愛子は光に顔を背けてウト／＼して居つた。菊代はそつと傍に行つて、

「嫂さん、兄さんがお歸りに成りましたよ」

嫂は眼を覺して、靜に此方へ寢返した。

「ア、お歸りで居らツしやいますか、何うか御免遊ばしまして……」

「悪いさうだね？」

凝然と顔を見ると、十日前に嫣然笑つて、何うか御心配なくと自分を送つた時の元氣は無く、僅かな間に見違へる程瘦せて色が青かつた。その上太く咳嗽をした。三郎は驚いて、

「菊代、姉さんは何んな容體だな？醫者は何んな診断だらう？」

「咽喉と肋膜がお悪いさうでございます……」

「左様か。そりや病人始め皆囁困つた事だらう！生憎吾の留守中にな……」

病人は實に濟まぬ事だと思つた。この節は胸の痛みが段々に烈しく成つて、咳嗽をすると胸が裂けるやうであつた。痰を鼻紙に取つて見ると、生々しい血の塊の出した事なども二三度あつた。醫者に聞いて見ると、餘り咳嗽をなすつたので、咽喉が破れたんでございませうと言つた。併し咽喉にも肋膜にも關係のない胸の斯んなに痛むのはと、愛子は内々自分で自分の病症を疑つて居つた。併し未だ肺結核だとは自分は思つて居なかつた。

三郎は其の夜直に醫者の許に申出かけて行つた。翌日から直に看護婦を雇ひ入れた。女中も即日二人に成つた。病人は益々夫に氣の毒に思つた。

「良人！」

「何うした？」

「濟みません！直に治りますからね……」

「何にも心配する事は無い、ゆつくり養生しておくれ！」

愛子の眼には感謝の涙が沸いて溢れた。三郎は主治醫と相談して、更に當代の大家を聘し、隔日位に立合つて貰ひ、我が現在の境遇に於いて容す限りの方法は残らず取つて看護した。三郎は一日主治醫に問うて見た。

「先生、何處か温い所に轉地させては如何でせう？」

「結構ですが、このお寒い最中に動かすのは好くありませんまい」

成程大きに左様であるので、三郎は病室を暖にして、及ぶ丈大切に看護して居つた。病人も何うかして本復しやうと努力した。

併し症状は段々に險惡に陥つて、既に二月の月に入ると、病人は毎日二度位づゝコップに一杯位咯血するやうに成つた。それと共に身體は段々瘦せて来て元氣が衰へ、一夜の中に二三度も寢巻を取換へるやうに寝汗が出た。その上咳嗽が太く出て、胸が痛い、胸が痛いと言つて居つた。

それでも二月一杯は何うか斯うか持耐へて三月に入つた。庭の梅は今が丁度盛りであつた。

「最う彼岸に間も無い、暖く成つたら追々に治るだらう！」

三郎はこれを楽しみにして居つた。所が困つた事が出来た。これまで病人には一同堅く口を噤んで、肺結核と云ふ事は知らせぬやうにしてあつたのに、或る時急に交代つた看護婦の口から圖らず此の秘密が漏れて了つた。

「ア、左様か、それぢや最う所詮助かりやうは無い！」

この夜から又太く熱が出て、病人の容體は急に悪く成つて來た。

その翌夜であつた。三郎は看護婦が湯に入つた間、一人で枕頭に坐つて居ると、病人は凝然と眼を開いて、夫の顔を見たが涙含み、

「良人、何うか、お許し下さい濟みません！」

「餘計な事を考へると、益、身體が疲れるからね、氣を大きく有つて居つて、一日も早く治つておくれ！」

「良人！」

病人は齒を切んで、

「肺病と云ふは、實に悪い病でございますね！何とかして、この病を退治する方法は無いものでせうかね！坂本の叔父もこれで生命を奪られ、今度は又斯うして私までが……」

三郎は何と慰めやうも無かつた。

「良人にお別れ申し、二人の小供を置いて行かなければ成らぬのも、皆この病氣の爲だと思ふと、私は實に悪くて悪くて堪りません！」

愛子は凝然と思ひ入り、

「ア、何うかして最一度治りたい！何か此の病に勝つ薬物は無いものでせうか。この病が治らうな

ら、私は何んな薬物でも喜んで今頂きます！でもそれが無いとすれば、私は最う今夜にも、良人にもお別れ申し、二人の子供にも別れて行かねば成りません！マア何と云ふ酷い病でせうねえ！」  
言ひも終らず又た咳嗽入り、両手に胸を抱いたと思ふと、病人は見て居る中に又かつとコップに紅い血を吐いた。

(五十七) 空 蟬

併し愛子は幸福であつた。四月上旬に成つて、最う愈々と云ふ場合に迫ると、姑に得た信仰が盛んに胸に燃えて来た。それと同時に愛子は最早少しも死を恐れぬやうに成つた。また未來に就いても今は全く疑はなく成つた。即ち既う整然と安心が定つて居つた。死ぬる二三日前であつた。

「良人何うも長々一方ならぬお手厚い御介抱に預かりまして有がたうございました！誠に相濟みませぬが、私はお先に參らせて頂きますよ。良人に添はせて頂きましたのは、誠に短い間ではございませぬが、百年添はせて頂いたも同じやうに、私には最うこれで、夫の愛も小供の愛もお蔭さまで好く解りましてございませぬ！私は最うこれで十分に満足して、喜んで如來さまのお側に歸らせて頂きます。





はれた母も涙を流して居た。霞子は母の枕頭に坐り、

「母さま何時お治り成さるの！早くお治り成さらないと、最うお花見に行かなくなつてよ。ホラホラお庭のお花が彼んなに散るわ！」

骨と皮とに瘦せ細つた母はじつと眼を閉り、枕に涙をハラ／＼流した。

「サアお嬢さま、お庭に行つて、彼の椿の花を拾ひませうね」

看護婦さへ堪らなく成つて、霞子を無理に連れて出た。

菊代は彦一を此方の部屋に抱いて来て、騙しながら我れも可愛子を有つ身の、身につまされて泣いて居た。三郎は通りかゝつて凝然と見て、

「菊代何うした？長々御苦勞だったが、最う嬢さんも長い事はあるまいよ」

言つて病室の方に行つた。  
この明くる日の夕方に、愛子は愈、臨終に迫つた。併し既に胸が定つて居つたので、その臨終は誠に安らかな事であつた。この日は朝から極めて長閑な日であつたが、愛子は午後の三時頃に、眼が如く眼を閉ぢて、静に最後の息を引いた。菊代と彦子はワツと泣いたが三郎は彦一を抱いて合掌し、眼を閉ぢて静に妻を送つて居た。坂本家の未亡人は霞子を抱いて手に数珠を掛け、お念佛を唱へなが

ら姪の最期を送つて居たが、愈、事が切れると死顔を覗き、

「ア、立派な臨終であつた！嗚辛かつた事であらうが、最う今頃は結構な所に歸らせて頂いて……」

風も吹いて居ないので、庭の櫻や桃の花などが、自然枝を離れて、この時暫くヒラ／＼と散つた。

宛然紅白の蓮華が降つて居るやうだつた。

僅か五分か十分おくれで、年の比四十五六の上品な夫人が駆着けた。これは愛子が生の母親の雪枝であつたが、最う事の終つた後であつた。

「サア何と云ふ親縁子縁の薄い人達であらう！」

一同は顔を見るなり氣の毒に思つた。愛子が生の母親の雪枝は三四年前に二度添の夫に死別れ、今は長男の海軍中尉に身を寄せて、佐世保で暮して居るのであつたが、今度愛子が危篤の報に接して、取る物も取敢ず出て来たが、僅に時間の遅れた爲に、死目にさへも會はれなかつたのであつた。

(五十八) 春の悲哀

三郎の生涯にはこれで又一段落が着いた。結果は兎もあれ我が最愛の妻の死は、是れ確に我が生涯

の一段落と認めざるを得なかつた。一同は死骸の側で涙を流し、生前の事を語つて、皆その死を惜んで居る中に、三郎は凝然と腕を組んで眼を閉り、妻の死に就いて色々深く考へて見た。

「妻は今年二十六歳、果して天壽を以て終つたのであらうか。また彼の女の任務を果して終つたのであらうか」

これが真先に三郎の胸に浮んだ疑問であつた。

「二十六歳、未だ人間の定命の僅に半数、小供も未だ母の愛が無くては立たぬ！妻の死は天壽も全うして居なければ、その任務も亦決して全うして居らぬ！」

初めは先づ斯う云ふ斷案が下された。さうすると三郎は妻に何だか非命の死でも遂げさせたやうで腹の底から胸を突貫くやうな悲みが湧いて来て、神や佛の神聖を汚さずには居られ無く成つて来た。それと共に三郎の兩眼から苦い涙がハラ／＼溢れた。

三郎は堪りかねて、切めては妻の死顔を見ると、骨と皮とに瘦せては居るが、いかにも我が死に満足したやうに、何とも言ひやうの無い優しい尊い顔をして、いと安らかに世を終つて居た。

三郎は胸を撃れた。妻の優しい尊い死顔に我れを撃れて、おもはず敬虔の念を發して、その死の前に兩手を合せて跪いた。

「ア、いや然うで無い！」

忽ち我が父母の死に臨んでの遺訓が胸に生きて来た。その遺訓を尺度にして、更に妻の死に就いて考へて見ると、大いに悟る所があつた。

「自分が若し愛子を妻に得なかつたならば何うであらう？母に彼んな温い平和な晩年を送らせる事が出来たであらうか。若し愛子が世間普通の女性であつたならば、母は斷じて彼んな平和な晩年は送り得なかつたに違ひない！而て見ればたい其丈でも彼の女は我が妻として、既に充分その任務を果して居るでは無いか」

三郎は更に又、

「世には生涯連れ添つても、終生夫に満足と與へぬ妻も少なく無い。然るに我が妻は何うであつた。相添うた月日は僅か七年に過ぎなんだが、我れを慰め我れを勵まし、我れは全く妻の愛に依つて生き、毎日愉快に今日まで苦痛を知らず働いて来た上に、二人の小供まで與へてくれたでは無いか。人間が慾を言つた日には際限は無いが、小供も既に乳を離れこれから先は誰の手に依つても育つ。而て見れば姑に對しても夫に對しても、又は我が子に對しても、最早十分その任務を果して居るでは無いか。無暗に死者を怨んで成らぬ。神佛のお思召を汚しては相濟まぬ。ア、過まつた過まつた、悲みの餘

りに飛んだ了簡達をした、何うか許して貰ひたい！」

窃に謝して又顔を覗いて見ると、我れに何をか教へる如く、妻は其の死顔に益々尊い光を示して、實に拜みたい程氣高く見えた。

三郎は此の夜産一を抱いて寝た。親は無くても子は育つと言ふのは實際だ。イヤ親が無くても子が育つと云ふ譯では無いが、世は又方便なもので、三郎は産一を抱き、

「最う母さんが居ないから、これから坊やお父さんと寝るんだよ」  
言つて聞けると點頭いた。産一は未だ數へ年三ツにしか成らぬ。父の言葉を聞分けた譯でもあるまいが、兎に角これまでとは打つて變つておとなしく抱れて寝た。

三郎は我が子の愛が一しほ慕つた。俄に父母を兼ねたからであらう。幾度も幾度も抱きしめて、撫でたり擦つたりして遣つて居る中に、産一は我が懐でおとなしく眠つて了つた。

「可哀さうにな、最うお前には片親しか無い！」

三郎は泣いて、

「吾は幼い時に父親に別れて母の手に育つたが、この兒等姉弟は母に別れて父親の手に育つのか。我が母は吾等兄妹の犠牲に成られた。ア、自分も決して二人の子供を繼母の手などにはかけまい！最う

最う妻の愛も家庭の趣味も存分に解した遺憾は無い！」

三郎は近頃太く疲れて居たので、斯んな事を思ひ泣々眠つた。

翌朝眼を覺して見ると、枕頭の障子に赫々と春の朝日の光が差して居た。ひよいと見ると産一が居なかつた。小供は先に眼を覺し、勝手に床から出て居たのであるが、三郎はそれを少しも知らずに眠つて居た。三郎は此節自分が如何に疲れて居たかと云ふ事が好く分つた。

眼の覺めると共に、三郎は何より先に妻の事を思つた。

「ア、今朝は最う此世に居らぬ！」

おもふと共に三郎は、直にむら／＼悲しく成つた。

「ア、昨日までは病ひながらも此の世に居たが……」

三郎は起きる早々涙を流し、縁先の障子をスツと開けて見ると、和かい朝風に花がヒラ／＼散つて居た。折に會へばこれも流石に哀れなり、今朝の三郎は浸潤春の悲哀を感じた。

(五十九) 寢 姿

三郎は手水を使い、死者の部屋に行つて見ると、お燈明が上つて線香の煙が立ち、母の雪枝が前に坐つて泣いて居た。

「おッ母さんお早うございます。昨夜は嘸お疲れでございましたらう！」

「いゝえ」

雪枝は退つて、涙を拭いて、

「お早うございます。三郎さん貴郎別にお障りもございませんですか。マア長い間ねえ介抱して頂いて……」

「昨夜充分皆さんに休ませて頂きましたんで、今朝は大分頭腦が判然して来ました」

言つて死者の方に面ふと、既に蒲團を取退けて、裕が一枚かけてあつたが、いやと云ふ程度せ細つて、その寝姿はまるで一筋の糸を長く引いたやうに見えた。

三郎は枕頭に坐つて、死者の顔にかけた白帛を取退けて見ると、最う全然相好が變つて居つたが、愛と情とに充滿ちて其の懐かしい面影は今も猶残つて居た。三郎は一目見て涙含み、

「嘸辛い事だつたらうね、まあ斯んなに瘦せて……。ねえおッ母さん！」

「でもまあお手當が好かつたので、これまで保つたのでございませうよ」

三郎は本の通りに白帛を被せて香を焼き、死者の側に坐つて居ると、今朝は又愚痴に返つて、止度なく憂ひが募つた。

雪枝は察して、

「マアねえ短い御縁で、この娘も嘸彼の世から、貴郎にお詫び申して居る事でございませうよ。私に時々寄來してくれる手紙にもね、貴郎が誠に優しくして下さるから、どうか安心してくれろと申しましてね……」

「私はまあ何うして遣る事も出来ませんでした、母に好くしてくれましたんで、一緒に暮した月日は假令短いむしろ、私は最う其丈で充分に満足しますのに、今日まで能く勤めてくれましたんで、夫婦に成つた甲斐は十分にありました！たゞ短い生涯で終らせたのが残り多うございますが、定命とあればこれも致方はありません！」

「そのお言葉を承はりましたら、この娘もまあ嘸喜ぶ事でございませう！ですが私は三郎さん、今も此處で獨りで熟々然う思つて居りましたの、まあ何と云ふ不仕合な身に生れて來たのであらう？生れ落つると間も無く私に別れて繼母の手にかゝり、散々苦勞をして此方に出て參り、叔母に修業させて貰つて當家さまへ上り、お姑さまにも好くして頂き、貴方にも存分に愛して頂き、先づこれと喜ん

毎まい日にち樂たのしく暮くす間まは眞まことの僅わずかで、斯かう云いふ病びやう氣きに罹かつて逝いくとは、我わがが子こながらも實じつに氣きの毒どくで成なりません！」

「イエおッ母かさん、世よは何なに事ことも此こゝら方の思おもふ通とほりには参まゐりません！私わたしとても今日こんにちまでの事ことを思おもふと、母はから一通ひととほりお聞きき及びおよびでもございましてらうが、母お子こ妻さい子しが集あつつて、一いっ緒しょに樂たのしく暮くしたのは實じつに短みじかい間までした！併ひし昨きのう夜やも獨ひとりで熱あつ々あつ然ぜんう思おもつた事ことです。この世よでは所しよ詮せん何なに事ことにも皆みな満まん足ぞくを求もとめる譯わけには行いかぬ。併ひし萬ばん事じ不まん勝ぢやうの其そのの間まにも、此こゝら方の思おもひやう次しだい第だいでは十分じふぶんの満まん足ぞくを神かみ佛ほとけは人にん間げん個ご々ご銘めい々ごに整ちやう然ぜんとお與あたへ下くださつてある。何なに事ことにも足たらぬを言いへば限かぎりは無ないが、不ふ満まんの中なかにも満まん足ぞくを求もとむれば感かん謝しゃすべき餘あま地ちは十分じふぶんにある。ア、悲な歎なげの中なかにも幸かう福ふくだ！この中なかに自じ分ぶんが病びやう氣きでも困こまる、小こ供どもに別べつ狀じやうがあつても、誰たれに苦く痛つうの訴うたへやうも無ないが、先まづ／＼有あがたいと私わたしは感かん謝しゃ致いたしました！」

「イヤそれは最も貴あな郎たのお言ことば葉はの通とほりです。この娘こにして同おなじこと、慾えを申ませば限かぎりはありませんが、假た令とこの世よの御ご縁えんは短みじかくてもねえ、眞まこと個ごにまゐお蔭かげさまで仕しか合あひございしましたよ。何なにんなにかまあ喜よろこんで行いつたことでもございませう。私わたしから厚あつくお禮れいを申まします！たい濟すまないのは三さん郎らうさん私わたしです。それで貴あな郎たに少すこし御ご相あ談だん致いたしたい事ことがありますね……」

「何なにうか何なになりとも御ご遠えん慮りょなく、仰おつしや有あつて見みて頂いたきたう存ぞんじます！」

「イエ外ほかでもありませんが……」

言いつて死し者しやの方かたを見みて、

「誠まことにお恥はづかしい事ことでございませうがね、私わたしは此この娘こに對たいして母はの道みちを缺かいて居ゐります。眞まことの生うみ落おしと申ますばかりでしてね！」

「でもおッ母かさん、その時ときの餘あま儀ぎない御ご事じ情じやうとあれば、それも致いた方かたは無ないではございせんか？」

「それは左ひだり様さまでござんすがね、よくせき親おや縁えん子こ縁えんの薄うすい母お子この約やく束そくだと見みえましてね、母お子こ身み二ふたツに成なつて足あし掛か三年さんねんとは申ますもの、滿まん一いち年ねん半はんと少すこしか經たない中ちゆうに別わかれ、十じゆ幾く年ねん振ぶで此こゝら方かたで會あひ、先まと互たがに喜よろこぶ間まも無なく、私わたしは佐さ世せ保ぼに參まゐる事ことに成なりまして、また西にしと東とうに別わか々に成なりました。今こん度は病びやう氣きと聞ききまして、取とる物ものも取と取とず參まゐつて見みれば何なにうでせう、僅わずか時間じかんの遅おそれた爲ために、死し目めにさへも會あへないとはねえ……」

「實じつにお察さつし致いたします！」

雪ゆき枝えだは又また涙なみだを拭ぬいて、

「弟あとうの方かたもお蔭かげさまで、最もう兵へい學がく校がうに入いりましたので、小こ供どもは兄あに弟ていとも形かた付つきましてございませう。そ  
れで最もう私わたしの身みは、只ただ今いまの所ところでは何なに處ところへ居ゐやうと別べつに差さ支しはありませぬの。如いかに何なにでせう三さん郎らうさん、私わたし

は娘を育てなかつた代りに、切めては娘の生んだ二人の小供を娘に代つて育てさせて頂きたいと思ひますが、私にお任せ下されば結構、直に御近所でもお離し成さるのをおいやでしたら、貴郎のお身體に今後お極りの付くまでなりと、私を此儘當家さまへ置いて頂いて、二人の孫を見させて頂く御都合には参りますまいか」

「そりやおッ母さん私からこそお願ひ致したい所です。若もそんな事に願はれませうならば、私は何んなに仕合でせう。小供は何んなに幸福でせう。然う願はるればおッ母さん、私は眞個に安心です。小供に取つては母親が生き復つたのも同じです。それぢや何うか是非然う云ふ事に願ひます。私は何んなに助かるでせう。斯う成つては唯荷に成るのは小供の事です。おッ母さん私は最う妻の愛も家庭の趣味も既に充分解しました。最う此の上は何んな不自由な思ひをしやうと、二人の小供を氣の知れぬ繼母の手かけやうなどは思ひません。それでは是非何うか然う云ふ事に願ひます！」

「當分の所でも然う願はれますればね、私も誠に有がたいです。承はれば菊代さんもお近中に此のお隣家へお引越下さつて、お世話を成すつて下さいますさうですから、然うすれば御一緒に小供は他人の手かけす大切に育てます」

「おッ母さん、左様願はれますれば私は實に助かります。昨夜も實は小供の事はかり考へて居りました」

(六十) 我が亡妻

亡妻の死骸を葬つた後の三郎は、世界の人類が悉く絶滅した跡に我れ一人取殘されたやうな氣持がした。何とも言へぬ淋さが深く腸に食入つて、一木一草悉く我が亡妻を想ひ起す媒介に成つて、日夕殆ど悲泣の苦痛に堪へかねた。

「最う幾ら歎いて見ても仕方が無い、死んだ者は歸つて來ぬ！」  
理性は敏く諦めても、情は三郎を縦さすに日には幾度か想ひ出させては泣かせ、泣かせては又想ひ出させて、眠れば夢に、覺れば現幻に、我が亡妻の面影が絶えず三郎の眼に見えて、その聲が耳に響いた。

始めは自然に任せて居つたが、それでは日々精神や肉體が段々弱つて來るやうに覺えた。  
「ア、おれには子がある、事業がある。即ち大なる任務がある。男兒が斯んな弱い事で何うする！」  
三郎は飄然として思ひ返し、次には努めて己れの情を飽くまでも壓へつけやうと試みた。即ち理性

我が亡妻

を以て情を征服しやうと力めた。けれどもそれは無益であつた。争へば争ふ程、彼は益々、苦痛を感じた。

「情と理性は別物だ！」

三郎は始めて此に氣が附いた。その後は自然に任せて泣いた。毎日箸の上下にも妻を偲んで三郎は心に泣いた。

「最う自分は再び恩愛の絆を作つて自ら苦しむやうな事は断じてせぬ！」

三郎は斯う決心して了つた。

「正面には何か人類の福祉を進める事業に従ひ、一面に於いては妻が二人の忘形見を大切に育てやう！これが或は神佛の我れ三郎にお授けに成つた事業かも知れぬ？」

同時に三郎は斯う云ふ考へを抱いて来た。

「過去は夢！これを我が生涯の一段落として、これから生れ變つた人間に成つて、一番大いに働いて、我れ三郎が此の世に出て来た記念を遺さう！」

希望は勇氣の動力である。三郎は此の年の夏から漸々憂ひに遠ざかつて再び好個の奮闘兒に立返り更に大いに働くやうに成つたので、會社でも喜ぶ、身邊の人々も妹の菊代を始め安心して、皆この人

に深く同情し、心に痛い手傷を受けて居る人として、四圍から皆温に三郎を撫恤つて居つた。

仕合と三郎は、小供二人の上に就いては、大いに安心して働く事が出来た。雪枝が其儘此方に居て娘に代つて世話をした。菊代も隣家に引起して来て、我が子同様に世話をしてくれたので、小供は母には別れても、後は誠に幸福な事であつた。

「世は何うに行くものだ！」

三郎は感謝して働いて居つた。併し小供を見れば我が亡妻を思ひ出し、我が亡妻を思ひ出せば、我が子に對する愛が増した。

「若し小供が無かつたならば……」

三郎は何うかすると、淋しさに堪へかねて、我が生命の價值を疑ふやうな場合もあつた。併し又翻然として思ひ返し、

「イヤ小供がある。二人を育てあげねば成らぬ！」

母に別れ、妻の愛に離れた後の三郎の生命は、一に全く小供に在つた。小供と一緒に暮して居るのが三郎には、この節實に何よりの慰安であつた。小供も亦二人共に父を慕つて、家に居れば少しも側を離れなかつた。それに就けても三郎は我が亡妻を思ひ出すには居られなかつた。



「若しこれまでのやうに両親揃つて、一緒に育て、行つたならば、それこそ何んなに楽しいだらう！」  
夫婦揃つて暮して居る人の果報が、三郎には心から羨ましく思はれた。そんな時には黙止つて居られず、罪な事とは知りながら二人の小供の顔を見て、

「お前達の母さんは何處へ行つたらうな？ 他家の母さんは皆家に居るでは無いか」  
姉は笑つて、

「家の母さんは最う死んだのよ」

弟は未だ口が利けなかつた。四邊をきよろく見廻して連りに戀しい姿を探した。斯んな時には三郎は堪りかねて彦一を抱き、一間に掲げた肖像の前に連れて行くと、彦一は喜んで愛らしい顔を出し、「母ちゃんベア！」  
實に人間恩愛の悲劇であつた。

(六十一) 墓 参

言ふべからざる悲歎の中に春も暮れ夏も過ぎ、庭の桐の葉が初秋の風に一葉ふはりと落ちた朝、三

郎は急に東京を立つて上海に出張した。雪枝は菊代と小供を連れて新橋まで三郎を見送つた。

頃は九月の下旬であつたが、その日は空が曇つて居た。妹婿も一歩おくれで遣つて来て三郎の手を握り、

「それぢや何うか御機嫌宜う！ 何うかお留守中の事は御心配なく……」

「何分お頼み申します！ おツ母さん菊代、それぢやこれで……」

「それぢや何うか御機嫌宜う！」

「坊や、祖母ちやんと好くお留守をしてお居で！ 腹子もおとなしくして居るんですよ」  
言つて三郎は叔母に手を引かれて居る姉の頭を撫で、遣り、次には自分の抱いて居る弟の頭を撫

で、

「それぢや最う祖母ちやんに行らつしやい！」

雪枝に渡して、

「何分お頼み申します！」

「叔母さんも居らつしやいますから、何うか御安心成すつて！」

「ぢやア最う何うかこれで……」

鈴が鳴り出したので、皆急いで汽車の外に出た。

最う汽車が出ると云ふ所に、坂本家の人々も見送に來た。

僅に言葉を交したばかりで汽車は早くも動き初めた。

「何うか御機嫌宜う！」

互に挨拶して居る中に、最早その間が五六間隔たつた。三郎は窓から顔を出して此方を見て居た。別れに臨んで彦一が、小さい手で招いたのも、多分三郎に見えたであらう。

一同は汽車の全く見えなくなるまで見送つて居た。愈々行つて了つたので、皆後へ引返した。菊代夫婦は坂本家の親子三人に見送の禮を述べ、停車場の二階の喫茶店に案内した。一同椅子に掛つた後、

「私の氣の所爲でせうかね、三郎さんは近頃何だか身體の工合でも悪さうに見えますが……」

坂本家の未亡人が先づ斯う言ふと、菊代は直にそれに答へた。

「この節何だか顔色が勝れませんが、私も度々然う申して居りますが、否、何うも無いと申しまして。ね。今度まあ彼地から歸つて參りましたら、皆さんから然う仰有つて頂きたいものでございます！」

「私も太く氣に成りますのでね、昨夜も然う申しますと、何うもありませんが、菊代も太く心配しますから、今度歸つて來たら念の爲に一度醫者に見て貰ひませう。ナニ小供を二人置いてあるから

お愛が私を未だ當分は呼びに来るやうな事もありますまいなど、申語を言つてお居でゝした」

皆笑つたが、後では又心配して、今度歸つて來たら、是非健康診断を受けさせやうと云ふ事に一致した。

滞りなく社用を果して、三郎が上海から歸つて來たのは十月の下旬であつた。約一ヶ月旅で過して來た三郎を新橋に迎へた前の人々は、立つた時よりも更に一層三郎の血色の勝れぬのを見て驚いた。

歸京後四五日三郎は社用の爲に多忙を極めた。その爲に皆注意する機會を見出しかねて居た。報告その他も濟んだ所で、三郎は或る日曜日に小供を連れて、久振で染井を差して墓參に出かけた。

この日は誠に温かな美しい日で、秋空一碧天心まで透徹り、墓地には彼此紅白の山茶花やコスモスが咲いて、百舌や鶉や白頬鳥や五十雀などの聲が賑に聞えて居た。

三郎は先祖代々、兩親、二兄次は亡妻の土饅頭に水を手向け、香を上げ、各一對宛の花筒に綺麗な菊の花を分けて挿し、二人の小供を前に立せて凝然と拜んだ。三郎はフロックコート、彦一は八丈の綿入の筒袖にお召のちやん／＼こ、尊子は髪をお河童さんにして、紅入幽禪の袷に同じ被布を被て、まるで活きた人形のやうに見えた。

三郎は合掌して、暫く妻の墓前に伏して居た。日差は今が十一時頃で、日色品々として到らぬ限な

墓 寒  
く、小春日の暖さが墓地一杯に溢れて居つた。やゝあつて三郎は墓前に立ち、此處は人間の慾を離れた墓地の閑寂な景色を暫く見て居つたが、

「ア、母さんは好からうね、斯んな閑静な所に來て！」

霞子は墓地の閑静さに飽いたと見えて、

「サアお父さま、最うお家に歸りませうよ」

「ア、歸らうね！」

今日は何うしたのか三郎は、小供のあるのが苦に成つた。

(六十二) 悪 寒

二十歳前後の女中を供に連れて居つた。

「サアお坊ちやまお歸り致しませうね」

女中は彦一を負つた。

三郎は霞子の手を引き、顧み勝に我が亡妻の墓前を去つた。

何の墓の前を見ても、この節は綺麗な菊の花が上つて居た。三郎は墓地の間の道を通つて、巢鴨の通の方に向つた。八重に負さつて先に立つた彦一は、何うしたのか、急に振り返つて手を出して切りに父親に抱れたがつかつた。

「ちやア八重や、お前この兒の手を引いて遣つておくれ、吾が其の兒を其の邊まで抱いて行つて遣らう」

「左様でございますか、暫く旦那さまにお別れ成すつて居らつしやいました所爲でございますう」

「ちやア霞ちやんは八重にお手を引いてお貰ひなさい。お父さまは少し坊やを抱いて遣りますからね」  
言つて手を放すと、霞子は急に立止つて、これも同じく父の手を戀しがつた。三郎は實に小供に優しかつた。

「坊やを少し抱いて置いて、また直にね……」

霞子は點頭いて歩き始めた。

「サアお出で！」

三郎は八重の背から彦一を取つて抱くと、今日は何だか太く腕に徹へるやうに覺えた。抱いて僅許歩くと、今日は妙に息切がして咳嗽が出た。さうして何だか氣が重く、身體中が怠いやうに思はれた。

悪 寒

「會社の用事も済み、小供の無事な顔も見たので、急に気が緩んで、頓に旅の疲勞が出て来たものと見える。ハ、」

三郎は我れを笑つて、他の考へを打消した。併し何うも合點の行かぬ事があつた。何となく氣分が重く、身體中が何となく怠く、その上癡汗を掻き、咳嗽の出るやうに成つたのは、最う今度上海に出かける前からの事であつた。

三郎は道を歩きながら、ひよいとそんな事を思ひ出すと、急にいなや氣持がして来た。併し三郎は直に打消した。

「ナニ咳嗽は風の所爲だ、怠いのは疲れた爲だ、何も不思議な事は無いぢや無いか」

勇氣を鼓して力足を踏んで見た。さうすると又咳嗽が出た。また思ひ出す事があつた。

「今度旅行中に、一回は上海の宿屋で、また一回は船の中で、一寸した機勢に口から血が出たのは、アレは何うしたのであつたらう？」

三郎は思はず道に立止つた。併し又直に打消した。

「ナニ血は必ず肺から出るとは限らない。つまらん事を考へたもんだ！小供を持つて居ると、人は兎角餘計な事を考へるもんだな！今自分の身にそんな事でもあつては、この二人の小供は誰に依つて育

つ？馬鹿々々しい！」

努めてこんな考へを打消さうとしても、矢張氣に成る事が多かつた。今度歸りに船の中で、試みに體重を量つて見たら、去年量つた時は十五貫五百目以上あつたのに、今度は十二貫三百目しか無かつた。

「僅か一年許の間に三貫目以上も體重の減つたのは、何うしたのであらう？」

三郎は又氣にしたが、おもひ返して自分を叱つた。

「この春以來の悲哀に遭つたんだもの、體重の二貫が三貫減つたのは當然ぢや無いか」

疑懼の念を打消しく、巢鴨の通に出て見ると、來がけに水道橋邊から乗つて來た車が二輛未だ其邊に待つて居つた。

「旦那さまお歸りは如何でせう？」

この時分は未だ電車は無かつた。

「左様さな、歸途はこれから王子に出て道灌山の方でも散歩して、時間の都合では小供に團子坂の菊人形でも見せて行かうと思ふが、八重やお前は何うだな？」

「私は何方でも宜しうございます」

「左様か。何うせう？」

三郎は考へたが、

「何だか今日は氣乗がせぬな！ちやアマあ今日は此儘歸つて、この次の日曜にでもゆつくり出直して来る事にせう！ちやア車夫、御苦勞だが、駿河臺の東紅梅町までズツと行つて貰はうかな」

「畏まりましたでございます、何うかお乗し下さいませ」

三郎は彦一を抱いて車に乗り、色々な事を考へ〜小石川の指ヶ谷町邊まで来ると、何だか急に悪寒がして、いやな氣持に成つて来た。

### (六十三) 療 養

雪枝は三郎を迎へて眉を顰め、

「オヤ三郎さん何う成さいました？何だか大層顔色がお悪いちやありませんか」

「風でも引きましたか、おッ母さん私は太く悪寒がします！」

「ちやア直に暖にお休みに成つた方が宜いでせう！」

雪枝は急いで奥に入つて床を延べた。

三郎は服を脱ぎ、寝衣に着更へる。直と其儘床に入つた。同時に太く咳嗽をして今日も亦口から紅

い物が出た。

「ハアこれは愈、自分も遣られたな！」

三郎の身體にはズン〜温體が高まつて来た。菊代は驚いて飛んで来て、直に家の車夫を醫者に走らせる、一方には體温を取つて見ると、既に九度七分ばかりあつた。書生を走らせて氷を取寄せ、早速氷囊で冷し始めた。醫者は回診中であつたので、二時間許経つた頃に遣つて来た。容體を聞いて丁度診察し、

「ナニお風のやうでございます」

病人の側では軽く言つたが、

「ア、氣の毒な事だ！」

心の中では同情し、歸りに玄關で隠然と菊代丈には事實を告げた。病人も氣の毒であつたが、菊代も實に無慘であつた。こゝで兄の身に又萬一の事でもあれば、菊代の身内は最早絶滅して了ふのであつた。

「マア何うしたのだらう兄さんまで……」

菊代は顔を被うて泣いた。

翌朝體温は下つたが、三郎は眼を覺して見ると、全身綿のやうに疲れ果て、既に起き上る力も無く成つて居た。これまで多年最も勇敢に努力奮闘して人間の威力を遺憾なく發揮して來た三郎の大切な精力の貯蔵器には、今や既に破損の痕が明々見えて來たのであつた。

その症状は亡妻のと略同じ経過を取つて、この有數なる執務家の生命を容赦なく食んで進んだ。醫者は元より秘して居る、四圍の人々も菊代を始め、當人に力を落させる事を恐れて、事實を固く秘して居つた。三郎も最初の間は自己の運命に最負して、未だ半信半疑で居つたが、病の漸々進むに連れて、我が常識は我れをして、これは愈々肺患に相違ないと云ふ事を明らかに自覺せしめずには已まなかつた。

三郎は我が病症の何であるかを覺ると共に、戰慄つて身を拂つた。併し病症は既に深く彼の肉體に食入つて、我が生命をズン／＼食みつゝある事を知つた。

「これに罹つちや最う到底もいかん！」

失望し落膽し、果は人間悲痛の情に堪へなく成つたのも、我が生命を惜む爲では無かつた。我が子

を思ふが爲であつた。

「今自分が眼を閉ぢては……」

三郎は子の可愛さに再び勇氣を奮起し、進んで醫者に相談して、十一月の二十日過ぎ、或る暖かきうな日を見立て、湘南に地を轉じ、或る病院に入院した。

此處は後に近く山を負ひ、前は直ちに一望溶々として水天に連なる相模灘の面に枕み、氣候温暖にして大氣玉よりも清く、風景最も美にして萬の風物塵寰を脱し、氣温、空氣、又は土地の風光に至るまで、皆悉く衛生の約束に最も適ひ、病を養ふ地としては、地上の世界にこれ以上の適地當所が復あらうとも思へなかつた。

三郎は努めて心の平均を保ち、此處で靜に病を養うて見た。雪枝と菊代は交代に小供を連れて、月に二三度位づゝ必ず見舞に來て病人を慰めた。三郎は一冬此處に越して、相模灘の音も今は自然と耳に馴れ、後の山の櫻の花を月の窓越しに徹白く寝ながら眺める春の夜の此頃に成つても、病症は依然として怠ることなく、この容體では何時を待ち得て又本の身體に成れるか成られぬか、院長も其の邊の消息は訊いても判然漏らしてくれず、自分の心では甚だ覺束なく思へば思ふ程意氣自然に銷沈して、我れも世も人も誠に頼み少く、明けても暮れても心細さが絶えず水のやうに全身を傳うて動いた。

病症の爲に肉體が漸々衰へて行けば、それに伴れて精神も次第に衰へて行く。精神が衰へればそれに伴れて、また肉體が段々と衰へる。三郎は目下丁度此處に附打つて精神も肉體も相携へて日々衰へつゝあるのであつた。彼にして若し昔日の元氣に富んで居つたならば、此處まで病症の餌食になる憂ひは斷じて無かつたに違ひないが、哀れむべし失望と煩悶とは元氣に對する打撃に成り、今は徒我れから死を待つ形に成つた。

春の暖さは老人にも綿入を脱せる。數多の患者の中には拙者は體量が幾ら増した。飯を食ひ残して豚の餌にくれるなどは活地がない、そんな勇氣の無い事では人間の權威に關する。これまで大切な己れの温い肉を微菌に食せた代りに、今度は此方が微菌を食つてくれる。ハ、退院間近し愉快々々と、大手を振つて春の光の満溢れた廊下を歩き、我が健康の回復を誇る勇士もある中に、三郎は自ら我れを棄て、鹽を食つた蛭輪のやうに成り、臆に釘を打込まれて、背に庖刀を當てられた鰻のやうに我が死を許し、たゞ我が亡後の小供に就いて病苦以外に病苦以上の苦痛を覺え、世を果敢無み身を果敢無み、勿體ない程美しい此節の春の光を時雨れた後の冬の入り日より淋しく眺め、凝然と蹲いで居る中に桃も櫻も盛りとなり、最早明後日我が亡妻の一周忌と云ふ日に成つた。

(六十四) 恩 愛 刃

三郎は病院の一室にまるで生きた死骸のやうに成つて寝て居つたが、丁度去年の今頃の事に就いて思ひ出す事が多かつた。そんな事が觸つたものか、昨日から昨夜にかけて盥温が出て、久しく見なかつた紅い物が昨夜も今朝も口から出た。

今日は幸ひ院長の診察日であつた。今や我が胸に聴診器を加へられた三郎は、最早今日は死の宣告を受けるものだと思つて居つた。併しそんな事は無かつた。

「成るべく安静にしてお居なさい！」

外には何にも言はれなかつたが、院長の顔色は如何にも訝えぬやうに三郎には見受けられた。

「ハア最う愈い迫つたな！」

三郎は死を期した。

「何うせ死ぬなら家に行つて、切めては小供の側で眠りたい！それに明後日は妻が一周忌の命日だ！」  
東京の自宅では雪枝と菊代が相談して、今年に主人も留守の事だし、假にお經丈上げて置いて、本法事は何れ又時機を見て營んだが好からうと云ふ事に取極めた。二三日前寺の都合を訊いて見ると、

當日は生憎松平さまの御本葬があつて、大分取込む事であらうから、一日前に取越しては貰はれまいかと云ふ事であつた。それで一日早く營む事にした。その日に成ると約束の時間通り、午後一時に檀那寺の住職が伴僧を二人伴れて見え、三部經を上げる事にして、先づ無量壽經を讀み終り、今や觀無量壽經を讀みかゝつた所に、時は午後三時頃、全身骨と皮とに瘦せこけて、青い顔をした三郎が思ひがけなく歸つて來た。

「おやッ！」

雪枝も菊代も坂本家の母子の人も悔りした。

それとは明白に言はなかつたが、三郎は既に決心して、子に引かされて終に歸つて來たのであつた。三郎の歸るまでは、一同去年の明日の悲哀を語つて皆泣いて居つたが、三郎が歸ると共に、死者の暁は断然廢めた。

夕方お經の濟んだ後で、三郎は眞先に焼香した。さうして今度は自分が又斯う成るのだと思つた。一同も三郎の焼香して居る頼み少ない姿を見て、

「ア、最う長くもあるまいが……」

心の中で皆泣いた。

翌日に成つて見ると、昨日佛事を營んだと云ふ事は、雪枝に取つては大層都合の好い事になつた。目下佐世保在勤の子息の上官が、出京せられて、御子息の御縁談の事に就いて、至急御相談致して歸りたいから、今夜是非お來しを願ひたいと、京橋邊の或る旅館から手紙で言つて寄來された。

人の厚意は棄てられぬ。雪枝は家の事も氣に成るが、行かぬ譯には行かなかつた。間の悪い時は何處までも間が悪い。菊代夫婦は今夜また突然出かけなければ成らぬ事が出來た。

凶報！

赤坂の田町に居る夫久男の伯父に當る人が、急病で今果てたと云ふ報知が來た。これも實に餘儀ない事で、一方は此の上も無い慶事、一方は又この上も無い凶事の二色に世は分れて、雪枝と菊代夫婦とは三郎の事を氣遣ひながら相前後して、春の夕風に花の片々散り初めた頃、何方も車を飛して出かけて行つた。

去年の今日は妻が最後の息を引取つた日であつた。三郎は今日は朝から去年の今日の悲しい記憶を一々胸に想ひ起し、加ふるに我が亡後の事を案じて、實に切ない一日を過した。それが觸つたものか日没から又體温が高まつた。さうして夜に入つて咳嗽をして、痰を紙に取つて見ると、それは生々しい血の塊であつた。



「いかん、最う所詮助かるべき見込は無い！」

絶望しながらうつらうつらと暫く眠つた。その後眼の覺めたのは九時頃だつた。

小供は既に寝たと見えて、家は森として居つた。三郎は眠られぬ儘に又色々な事を思つた。

「ア、自分は何と云ふ哀れな運命を授つて此の世に生れて来たのであらうか？」

無理は無い。親子妻子と俱に居て、一家團樂の樂みを受けたのは、これまで眞個の僅な間で、その前後共に悲惨凄絶、實に人生の悲哀を極め盡して来た。心弱しと言ふ勿れ、これでは如何なる大丈夫兒も絶望せずには居られぬだらう！切めては老後の孝養を樂しんで来た親を奪はれ、今は唯彼の女に依つて愛を求めた妻を奪はれ、果は遂に我が一命をも奪ひ去られんとするのであつた。三郎は感慨胸に滿ち溢れ、今は自製の餘裕が無かつた。忽ち悲憤の涙を流して齒を食閉り、

「死は恐れぬが小供の事が諦められぬ！」

顔を被うて三郎は泣いた。雪枝は未だ歸つて来なかつた。三郎は涙を拭いて床の上に起上り、また何か考へ沈んだ。八重が静に襖を開けて、

「旦那さま、未だ御隠居さまはお歸りに成りませんが、一寸お隣へ上りまして、お湯を頂いて參つても宜しうござりませうか」

「ア、行つてお出で、表の戸を引いて置いてな」

「畏まりました」

「小供達は眠てるかい？」

「ハア熱くお休みになつて居らっしゃいます」

「ヨシ、行つて来い」

「ちやア頂いて參ります」

迎ひに来た隣の女中と一緒に、何か話しく春の夜の月を踏んで出て行つた。

「ア、何んな顔をして眠つて居るか、切めては眠顔でも見て遣らうか」

三郎は起つて一間に来て見ると、正面には我が亡妻の肖像が懸り、未だ十燭の電燈が點れ、二人の小供は床を列べて、何にも知らずスヤ／＼と夢安らかに眠つて居つた。

「オ、！」

三郎は二人の可憐寝顔を視た。

「両親に別れたら、これから何うして暮すであらう！今は笑つて暮しても、世の物心の分ると共に、

嗚や親を思ふであらう！自分の身にも覺えがある……」

三郎は又顔を被うて泣いた。泣いて又可憐寢顔を視て居つたが、またハラ／＼と恩愛の涙を流した。「何うしてこれが棄てゝ行かれる？」

三郎は凝然と考へ沈んで居つたが、その兩眼は見る／＼凄い光を放つた。

「ア、この世は何處まで残酷かも知れぬ。斯んな無慈悲な世の中に置いて長く苦しませるのは可哀さうだ。それより斷然一思ひに二人とも刺殺して連れて行かう。左様だ、最う考へる事は無い！」

直然と立つた三郎は、人間で無い鬼に化つた。彼は箆笥の抽斗を開けた。何か掴んで此方に面した。片膝立てた。同時にスラリと短刀の鞘を拂つた。先づ姉に近寄つた。その動作の神速さは、死に迫つた病人とは見えななんだ。

凝然と姉の寢顔を覗いて、柄に渾身の力を込めた。

「母さんの所に行かうね！」

切先が既に咽喉に迫つた其の時、霞子は忽ち眼を覺し、人あり引起したやうに飛起きて、

「お父さま怖いよウ！」

襟を掴んでしがみつき、胸に額を摺附けて泣いた。彦一も愕として眼を覺し、姉と一ツに固つて、夢中に我れに飛びついて泣き出した。この時撲地と亡妻愛子の肖像が前に落ちた。

三郎はうろ／＼した。その瞬間に兩親の遺訓が胸に閃めいた。

「任務が果てねば斷じて死なぬ。何んな大病に罹らうと決して怖れる事は無い！」

三郎は死なんとして却つて生きた。彼は忽地膝を打つて、

「ア、左様だつた！妻は死んでも自分が居つたが、自分が死ぬれば此の二人は孤兒だ！」

言つて兩手に二人を抱き締め、可憐顔を左右に見て、

「自分には未だ任務がある大任務が此處に在る！ヨシ俺は死なぬ、斷じて死なぬ！」

三郎の四肢には兩び生命が溢れて來た。そつと刃物を鞘に納めて後に押遣り、

「サア何にも怖い事は無いお寢しませうね！」

父の聲は母のやうに優しくかつた。その聲に安心して、小供は程無く又スヤ／＼と寝て了つた。三郎は其の可憐寢顔を見て、

「ヨシ死なぬ、斷じて死なぬ。自分は未だ／＼死ぬべき身でない！」

その兩眼には見る／＼勇氣の光が跳り、胸には生の希望が満ちた。

「精神は肉體の自然の保護者と聞いて居る。氣さへ確りして居れば肉の亡びる憂ひは無い！多數の人が此の病氣で遣られるのは氣を落すからだ。つまり病その者の爲に死ぬのぢや無く、精神的自殺を

おぼろ夜  
おぼろ夜  
おぼろ夜  
おぼろ夜

遂げるのだ。肺病が何だ。結核菌は何だ。ハ、何でお慈悲深い神佛が大切な人間の此の身體を、そんな物にも負けるやうな弱い物にお造り下さらう筈が無い！死ぬのは此方の精神力が弱いからだ。ヨシこれまで俺を苦しめた復讐に、今度は逆に此方から人間の威力を示して結核菌を食ひ盡してくれ！ナニ死ぬものか、断じて死なぬ！立派に健康を回復して、人間は結核菌より遙に強い物だと云ふ事を世の同病者に示して勇氣を興へやう！これが或は自分の授かつて来た任務かも知れぬ。左様だ或は其の爲に斯んな病氣に罹つたのかも知れぬ。然らば果さう、断じて死なぬ！治る、治る、今に屹度治つて人を驚かして見せる！」

こゝに思ひ當ると共に、三郎は腹の底から断々乎として生を期し、恐るべき威力を含んで直然と立ち、大手を振つてツシ〜と疊を踏み、落着き拂つて猛獸の野を行くやうに室内を歩き始めた。

(六十五) おぼろ夜

雪枝は太く心配して歸つて来た。表の格子戸を開けると同時に十時を打つた。急いで座に上つて見ると、病人が起きて、而も兩手を振つて部屋の内を歩いて居つた。雪枝は全く膽を潰して、

「オヤ起きて居らッしやるんですか」

「お歸んなさい」

「何うも遅く成りまして済みません！生憎向ふさまにお客さまがありましたんでね……。三郎さん起きて居らして宜いんですか」

「大丈夫です！家に歸つて小供の顔を見た所爲か、急に元氣が出て来ました！」

「それはまあ結構ですが、夕方の御容體ぢや何うかと思つてね、まあ何んなに心配して歸つて来ましたらう！」

三郎は感謝して、

「有がたう！併しおッ母さん、何うか御安心下さい。最う大丈夫、私の身體は屹度治ります！」

雪枝は忽地涙含み、

「治つて頂かずに何うしますか。マアこの二人の可憐寝顔を御覽なさいな何うでせう！今祖母さんが歸つて来ましたよ」

三郎は長火鉢の前に坐つて、

「二人の其の寝顔を見て今夜熱々然う思つたです、大人もそんな心持で居れば、断じて病氣などはせ

おぼろ夜

んでせうね姑君さん！」

「真個に然うでございますよ」

「病は氣から……。今夜は却つて小供から無病長壽の法を教へて貰ひました！姑君さん私はこれから生れ變つたやうに暢氣な男に成つて愉快に暮しますよ。氣にした日には限りが無い。世の中の事は何事も人間の註文通りには往きませんねえ！」

「三郎さん全くですよ」

雪枝も五十年近く實驗して来た。三郎は氣を轉じ、

「時に姑君さん、武男さんの御縁談は如何でした？」

「吉井大佐殿のお話ちや、大層好いのあるさうです。精しく今夜お話し下さいましてね、是非貰つたが好いだらうと仰有るです。それで最う私は萬事は忤任せと云ふ事に御返事をして歸りました」

「結構です！縁談など言ふものは、人間の思慮分別では極りません！某と某は何時幾日に結婚すると云ふ事は、最う整然と前の世から極つて居るんです。愈々其の場に打付るまでは、人間は誰もそれを知る事が出来んのです！」

「そりや左様に違ひありますまい。男も女も此の多い世の中にねえ、まるで見す知らすの者同志が、

また思ひも寄らぬ人の媒介で、夫婦に成るのは偶然と言へばそれまでの事ですが、好く考へて見ればねえ三郎さん！」

「左様ですとも！併し人間は何にも知らないので、萬事に了簡違をするんです！言ひ換へて見れば神佛の有がたいお思召に背いて、可愛我が子を刺殺さうと云ふやうな間違つた了簡も起すのです！」

「全くですよ三郎さん、神佛は決して可愛我が子を刺殺せなど云ふやうな無慈悲な事は仰せられませんわねえ！」

三郎は全身の血が沸立つた。悔悟して感謝して、

「おッ母さん、善く仰有つて下さいました！人は神佛のお思召に従順なのが何よりですね！」

「皆伶俐さうな顔をして居つても、人間の智慧分別は實に淺薄なものぢやありませんかねえ三郎さん！」

「然うです然うです全く然うですよ！」

雪枝は帯の間から紙に包んだ一枚の寫眞を出し、

「三郎さん此の娘ですよ。今度武男にと吉井大佐殿の仰有るのは……」

三郎は開けて見て、

「おッ母さん、これは屹度御縁がありますよ。好い嬢さんですなえ！」  
雪枝は笑つて、

「三郎さん、好く其の寫眞を御覽なさいな。他人の空似とか申しますが、廣い世間には酷く面影の似た人もあるぢやありませんか」

言はんと思ふ所を言はれ、三郎は眼を張つて、

「おッ母さん、こりや宅のお愛の何かぢやありませんか」

「血縁は少しも引いては居りませんが、身元を訊いて見れば、それが又妙なんですよ三郎さん、私の先夫の妹の娘に當るぢやありませんか」

三郎は活復つて横手を打ち、

「おッ母さん感謝しやうちやありませんか、神佛のお思召は那處に在るか分らんですなア！」

「マア不思議ぢやありませんかねえ！」

「全く攝理です！」

「オヤ愛さんの肖像は何うしましたらう？」

「靈魂不滅！」

三郎は心に叫んで、

「此處に在ります！」

三郎は我が亡妻の肖像を取出して光に照し、凝然と其の顔を見て、

「お前は死んでは居らんね！待つてお居で、吾の任務の果てるまで……」  
心に言つて顔を上げ、

「おッ母さん、お愛も安心するでせう、私は屹度本復しますよ」

おぼろ夜の月は庭の櫻にかつて、突然唄の聲が聞えた。

「死んでしまはうかア、そりや馬鹿々々しいよーい、のちありやくそ花も見イる！。畜生この世は五十年、ハア櫻が咲いたぢや無いかいなア！」

三郎は頓悟徹底、跳り上つて、

「ワハ、ハハ、ハハ、おッ母さん花見歸りと見えますねー！」

雪枝も笑つて、

「マア何うでせう、好い御機嫌ぢやありませんか三郎さん！」

(六十六) 復活の人

菊代は兄を氣遣つて、翌日の十時頃に様子をみに歸つて来た。菊代は昨夜赤坂で夜伽した。一ツは死者に接した爲でもあらうが、太く兄の事が案じられて、向ふへ行つて居つても氣が氣で無かつた。家へも寄らず直にズツと此方へ来た。

「お早うございます」

「オヤお歸りでしたか」

菊代は雪杖に挨拶して、

「昨夜彼方で夜伽致しましてね、歸る譯に参りませんでしたの」

「左様でございましたらうとも」

「昨夜は何んな容體でございましたか？ 久男も太く心配致しましてね、早くまあ一寸歸つて兄さんの御容體を伺つて来いと申しますのね……」

「イニ此方は大層元氣で居られます。それに今朝程は最うお早くお出掛けに成りましたよ」

「ぢやア最う病院へお歸りに成つたんでございませうか」

「伺ひますと、最う病院などへ行く必要は無いと仰有るんでございますよ。ぢやア未だお出掛けに成つちやいけませんまいと、私が餘程お止め申して見ましたけれどね、ナニ大丈夫ですと仰有つて、何方へかお出掛けに成りましたの」

「マア左様ですか」

菊代は全く驚いた。同時に太く氣遣つた。一寸家に寄つて、菊代は又直に赤坂に來た。久男も驚いて、

「お前途中でお目にかゝらなかつたか、今兄さんが此方へお見えに成つたよ」

「オヤ左様でしたか」

菊代は胸がワク／＼した。

「今朝歸つて見ますと、最う丁度留守の所でございましてね……」

「驚いたよ、彼のお身體で……」

「直に宅へお歸りなさるやうに、良人仰有つて下さいまして」

「お勧めしたが、ナニ最う暖に成つたから、少し運動して、これから日光を浴びるやうにした方が好いなど、仰有つてね、何しろ非常な元氣で居らした！ 併しお氣分が直れば、自然お身體の方も治つて

来るに違ひない。マアそんな心に心配せんが好い、常識に達した仁だから、人のやうに決して無鐵砲な事を成さる氣遣は無いよ」

菊代は絶えず氣に成るので、この翌日は葬儀の當日であつたが、外に用事もあつたので、午前の中に折を見て家に歸つて来て見ると、今日も亦三郎は早く出かけて居なかつた。元氣は好いと雪枝に聞いたが、菊代は何と無く不安に思つて、今度兄に會つたら外出などはせぬやうに、固く止めやうと思つて居た。

既に葬儀も事なく済んだ。この夜は又餘儀なく赤坂に宿つた。翌朝死者の骨上も済んだ。菊代は火葬場に行つたので、兄を思ふ心は益々高まつた。お骨を寺に納めて、また一度赤坂に引返し、夫婦一緒に宅に引上げて歸つたのは、既に其の日の午後二時頃であつた。

歸つて見ると、今日は朝早く横濱まで出かけたと云ふことで、三郎は同じく留守であつた。

「兄さんは餘り然う急に外出成さつては好くあるまい」

久男は眉を蹙めて言つた。菊代は自分でこれから迎ひに行きたく思つた。夕方から生憎蕭々と春雨が降つて来た。

その中に日が暮れた。三郎はまだ歸つて来なかつた。雪枝も堪りかねて隣家から遣つて来た。

「未だ歸つて見えませんがね、まあ眞個に何う成すつたんでせうね菊代さん、若やお加減がお悪く成つて、病院にでもお歸りに成つたんぢやありませんまいかね？」

菊代は立つても居ても居られなく成つた。

その中には愈々暮れて了つた。黄昏の花は浸潤雨に濡れて、何と無く春の哀れが深かつた。小供

を家に置いて来たので、雪枝は悄悄歸つて行つた。

家には既に電燈が點れた。夫は一寸夜食を待たせて、書齋で手紙を書いて居た。

菊代は此節又妊娠に成つて居た。部屋で夫婦の着物を疊みながら今朝行つた火葬場の光景を見るがやうに思ひ出した。

「ア、去年も丁度花の頃に行き、今年も亦圖らず行つた。二度ある事は三度あるとか聞くが、また来年も花の頃に、彼んな所に行くやうな事があつたら何うしやう！」

一ツは身體が不斷とは違ふので、それからそれと先々の事までが氣に成つた。

其處にひよいと三郎が遣つて来た。菊代は着物を疊みかけた儘飛んで出た。

「ア、兄さんお歸りでしたか。お出かけに成つても別にお障りはございませんでしたか」

三郎は笑つて、

「大丈夫！今日は一寸横濱まで行つて今歸つて来た所だ」

「餘りお出かけに成つちやお宜しく無いでせう！」

「ナニ大丈夫だ、注意は十分して居るから安心しておくれ、少し相談したい事があつてズツと此方に來たがな、今歸つて來た事を一寸家に知して遣つておくれ」

「ハア畏まりました」

「久男君は居られるかね？」

「居りますでございます」

「菊代、兄さんちや無いか」

今書き上げた一通の手紙を持つて、久男も丁度此方に出て來た。

「ア、兄さんお歸りでしたか、何うか此方へ入らして下さい！」

久男は手紙を菊代に渡して、直に三郎を奥に案内した。菊代は手紙を書生に渡して發送させ、急いで奥に來て席を設けて火鉢を出した。

「菊代、お前も一寸其處に坐つておくれ、君達に少し頼みたい事がある」

言つて三郎は改まり、夫婦に向つて、

「何うも今回は大變御心配をかけて濟まなかつた！併しお蔭さまで、吾は太く身體の調子が好いよ。時に早速だが、話は斯う成るんだ。マア何でも早く身體を丈夫にして丁はん事にはいかん。それで吾はこれから暫く養生がてら船に乗つて見やうと思ふ。御案内の通り今日の所では、未だ藥物の力に依つて此の病氣を根治すると云ふ事は望み難い。今の所では先づ空氣療法が一番好いと云ふ事に成つてゐるやうだ。それならば病院などに縮んで居るよりは海上の人と成つて、毎日存分海氣を吸うて日光を浴びた方が遙に工合が好いと思ふ。それで吾は既う話は取極めて來たが、これから暫く南洋通の船の會計方に成つて、話は少し早いが明後日出かける。それでお頼みしたのは家の事だ。此處に金が參千圓許ある。これを君方にお預けして置くから、この内から毎月家の費用を辨じて貰ひたい。吾も月に四拾や五拾の金は残して來るから小供に普通の生活はさせて貰ひたい。勿論下婢もこれまで通り使はせ、家も他に貸したりなどするよりは彼儘にして置いて欲しい。三ヶ月に一度は吾も歸つて來るか。な。御面倒であらうが、何うか萬事宜しくお頼み申す！」

話を聞いて菊代は驚いた。驚いたばかりで無く、菊代は兄の企圖に就いて不安に思つた。色々心配して止めやうとするのを久男は遮つた。

「ナニそんな心配する事は無いよ。兄さんの仰有る所は吾は至極賛成だ！醫者などは肺を弱くする



と、よく船醫に成つて海上生活をするに聞いて居る。宜しうございます、後は我々が何處までもお引受します。ちやア兄さん御心配なく行つて入らッしやい！」

話は既に極つて了つた。これと云ふのも三郎の精神が急に復活して來た爲であつた。

(六十七) 海上生活

運命は何時何處へ人々を乗せて行くかも知らない。

三郎もまるで思ひ設けぬ事であつたが、それから幾日か経つた後は、再び船の人と成つて四面渺茫たる海に浮び、早小笠原島を後に見て、航路を南に取つて居つた。

今度横濱で愈、南洋通の帆船白鷹丸に乗組んで見ると、實に意外な事があつた。第一この船の船長が三郎と幼馴染の男であつた。これは堺の豆腐屋の悴の庄吉と云ふもので、三郎が始めて大阪に奉公に出た時、天満で會つて自分が奉公して居る隣家の刷毛屋に三郎を周旋してくれたのは、實に今日の白鷹丸の船長、その頃は乾物屋の小僧の庄吉であつた。

「ヤアこれは！」

互に固く握手して、一別以來の話が大分長く續いた。次に此の船の運轉手は、これが又例の安治川丸時代の給仕仲間の一人で、名は伊勢巳之助と云ふ紀州生れの男で、三郎が始めて安治川丸に乗つた時、角井君の心添で金を參圓土産に遣ると、馬鹿に嬉しがつて、君酔つたら何時でも寝給へと云つた一人であつた。この男とも十幾年振で圖らず出會つて、互に一別以來の話をした後、また船員の一人に、幾度も兵學校の試験に落第して、その後行方不明に成つて居つた坂本家の書生松島速男君を見出した。

「オ、土肥さん！」

「こりや珍らしいな、君は松島君ぢや無いか」

落第の名人は頭を掻いて苦笑した。

「でも感心に船に乗つて居るな！」

三郎は心の中で哀れみもし、また其の志を褒めもした。三郎は思ひ出した。この男は自分が始めて坂本家に來た時に、太く亂暴な言葉を使つて、夫人に叱られた事があつた。色々話をした後で、彼は再び苦笑して、

「土肥さん、海軍士官に成り損ね、二百噸の破船の水夫長さんも世は又これで面白いですよ」

「君結構ぢや無いか。海軍士官と君の現在に何處に何丈の違がある？」

斯う云ふやうに此の船の主な職員は三人とも、皆おのれの舊知であつたので、三郎は非常に心強くも思ひ、また慰安にも成つた。

三郎は一夜月の舷頭に立つて海を見た。同時にひよいと安治川丸時代の事を考へ出した。

「こりや不思議な事があるもんだな！」

「怪底な！自分は安治川丸で最後の航海を遣つた時、忘れもせぬ瀬戸内海の或る場所で一夜月を見て思つた事があつた。自分は不思議な運命で、斯う三年間海上生活を遣つて来たが、これは徒これ切で終るのであらうか、それとも亦我れ三郎が前途に横はる或る運命の前提として、神佛は我れ三郎に今日まで三年間斯うして海上生活をお遣らせ下さつたのであらうかと、自分は竊に考へた事があつた。確に然う思つた事があつた。今でも判然記憶して居る！」

斯う思つて三郎は、また凝然と考へ込んだ。やゝあつて眼を開いた。

「ア、然うだ、確に然うだ！若し自分に彼様して三年間も船に乗つた経験が無かつたならば何うであらう？假令病氣を治す爲とは云へ、今日斯うして大膽に海に乗出して来る勇氣は或は無かつたかも知

れの？イヤ恐らくそんな氣は出なかつたであらう。而て見れば少年時代に於ける彼の三年間の海上生活は確に我が今日の運命の前提であつたのだ！」

此處に思ひ當ると共に、三郎は凝然と眼を閉ぢ、神佛に深く感謝せざるを得なかつた。それと共に三郎は我が前途の運命に就いて、更に一層大なる所の勇氣を得、希望を得、慰安を得、忽地一大心願を發した。

「自分の病氣は屹度本復させて頂く事が出来る！治つた上は何か一ツ有利な新事業を發見して富を造り、その富を以て世の肺病患者の爲に大いに盡さう、盡す事にしやう！さうしたならば我が恩人や妻が菩提の爲にも爲り、また自分としても誠に幸福な事である！ア、然うだ、自分はこれを使命と心得て、我が生涯を擧げて此の事業に捧げやう！」

三郎は決心した。安心を得た。同時に渾身確實に全く生の希望を得た。言ひ換へて見れば三郎は、我が健康に就いては最早毫も疑はなく無つた。更に言へば、最早自分の病氣は治るものだと思つた。更に言へば、最早自分の病氣は治るものだと思つた。更に言へば、最早自分の病氣は治るものだと思つた。

三郎は大なる勇氣と希望を得て、顔には絶えず微笑を含み、心には歌を有つて、毎日愉快に航海を續けた。この間に三郎は時々甲板に立つて深呼吸を始めて見たが、最初の間は苦しくて、二回と思が

續かなかつた。併し毎日段々習練して行く中に、次第に息が續くやうになつて来た。「占めた！」

三郎は喜んで、毎日怠らず深呼吸を遣つて居る中に、次第に肺が丈夫になつて来たと思つて、瓜哇に着いた頃は、最う一回に十分間位は、優に息が續くやうになつて居た。それと共に身體の調子も追追に好く成り、三郎は健康に向つて日々ズン／＼復活して行くやうな氣持がした。

航海の目的は、日本の雜貨を積んで行つて、土人と貿易して歸りには、向ふの産物を積んで來るのであつた。今度も首尾好く此の目的を達して歸航の途に上り、白鷹丸は七月の上旬に海上事無く横濱に入港した。

この時三郎の健康状態は益々好良で、僅か一回の航海で、身體の工合も大いに好く、體重も既に一貫目以上増して、血色もまるで見違へるやうになつて居た。

七月下旬に又横濱を出帆して南洋に向ひ、今度は九月の末に歸り、次は十月月上旬に出て十二月の末に歸つて來た三郎は、最早殆ど健康を回復して、意志の確かな昔日の三郎自身に復つて居つた。

### (六十八) 生の勝利

翌年も三郎は此の事業に従事して、春夏秋冬の四回に互り、都合四回白鷹丸の會計主任として南洋通を遣つた。

この間に三郎の健康は全く回復せられて、一時は體重十貫目餘りに減じた男が、今度は十八貫八百目と云ふ體重の所有者になり、最早肺のハの字も無く、今は逆に健康を人に誇れるやうになつた。

この年の十二月下旬、今年の最後の航海から歸つて來た時、三郎は嬉しさの餘り猿股一ツになつて立派な身體を菊代夫婦や雪枝に示し、拳にツシム胸の邊を叩いて見せて莞爾笑ひ、

「健康は美なり！皆さん何うか御安心下さい！最うこれぢや殺しても死にませんよ。フハ、、、」

「マア兄さんはお肥り成すつて、まるでお相撲のやうですね！」

「實際立派な身體に成られた！」

菊代夫婦は喜んだ。雪枝も共に喜んで、

「最うそれならば大丈夫です！小供は何んなに仕合でせう！」

「彦」も明くれば最早六歳になる。裸體に成つた我が父の身體を凝然と見上げて居つたが、

「お父さまお相撲取らうか」

四股を踏んで、父が左の太股に小さいのが確りと抱き着いて、力を出して「アア」と言つた。

「松に蟬の止つたやうだね、さやん！」

祖母さんや叔母さんは笑つた。三郎も笑つて可憐頭を撫で、遣り、

「お前も斯んなに大きく成れよ」

身體も出来た、小供も育つた、金にも幾分餘裕が出来た。併し此處に一ツ問題が起つて来た。三郎は二ヶ年間、今度親しく南洋貿易に従事した結果、会社の遺口の甚だ面白く無い事を実験した。長く其の方法で遣つて行くと、自然此方の不利益に成る。三郎は其の點を一々指摘して、会社に向つて忠告し、併せて今後採るべき有利なる方法を親切に勸めて見た。

併し会社には此の理想的人才を用ひ得る程の大頭が居なかつた。たゞ目前の利益ばかりを的にして三郎の忠言には誰も耳を傾ける者が無かつた。三郎は其の愚昧を哀れんで、一々實例を擧げて、更に大いに会社に向つて説いて見たが、三郎の忠言は容れられず、会社は却つて三郎の厚意を逆に取つて、今度突然三郎を言はゞ放逐して了つた。

この不幸なる出来事は、却つて三郎を幸福なる方面に向つて進ませる形に成つた。本来三郎は立派

な信仰を有つて居り、常に其の信仰と共に語り共に動く男であつた。その上學問に於いても見識に於いても又は抱負の點に於いても、到底彼等の敵では無かつた。加ふるに圖抜けた好い頭腦を有つて居り、何處へ行つても一事一物も空しく見過さぬ男であつた。以上の要素を充分具へた三郎は、過去二ヶ年の間に於いて、南洋の事情には最う透いたやうに通じて居つた。されば三郎は向ふから廢められぬまでも、此方の意見の容れられぬ上は、強ひて彼等に屈する事を好まなかつた。其處に持つて來て向ふから先に火蓋を切つた。氣概に富んだ三郎は、猛然として奮起し、

「宜しい！」

一時は肺も病つたが今では痕をも止めず根治して、新に造つた體量十八貫八百目の下腹にウンと力を入れた。

会社では全で虎の鬚を引いたやうなものであつた。三郎は即日資本を手に入れた。三郎を信じて即日資本を出したのは、横濱の生絲商で、今は莫大の資本を有する尾張屋の當主であつた。これは三郎が少年時代の主人の息子であつたが、心がけの好い人間は違つたもので、尾張屋が當時堺の呉服店を引上げて横濱に轉住した後今日に至るまで三郎は、或る時代には手紙で、また東京に來て後は時々必ず親しく訪ねて、二十年來絶えず美しい關係を繋いで居たのであつた。たゞ此の一事ばかりでも、世

間普通の人間には一寸出来難い事であつた。

大阪の角井君は此の二三年商賣上の失敗から逆境に立つて居つた。三郎は病中も絶えず援助して居つたが、愈々資本が出来たと成ると、直に角井君を電報で呼んだ。同時に最一人大阪から人を呼んだ。これは角井君の後を受けて安治川丸の事務長に成り、その頃好く三郎を愛して居た田中利三郎君であつた。

二人は直に違つて来た。

三郎は此の二人と相談して、折好く賣物に出て居つた二百噸の帆船を買入れた。至極固く出来た新造船で、補助機関が附いて居つて、直に間に合つて價一萬五千圓は高く無かつた。

次には直に商品の仕入にかゝつた。これには一寸思考を變へて、成るべく向ふの土人の好きさうな而も便利な目新しい物を選んでウンと仕入れた。

一方に於いては白鷹丸の船員が、會社で突然三郎を解雇すると共に船長始め皆船を下りて了つた。過去二ヶ年の間に於いて、三郎が如何に彼等と交つて居たかと云ふ事は、この一事に依つて明らかに證明せられた。一同會社の三郎に對する不法な處置を憤つて船を下りた其の當座は、船長始め三郎にそんな企圖があらうとは知らなかつたが、追々この事を聞いて皆三郎の下に集まり、給料などは安く

て宜しい。御都合次第では無給でも皆行く。彼んな面白く無い會社に居るのはフツ／＼いやだ。是非何うか貴下の船に一同を乗せて貰ひたいと言つて動なかつた。

三郎は此方が煽動した譯では無かつたので、少しも疚しい所は無かつた。それぢやと云ふので全員乗せた。同時にドシ／＼荷を積んで、十日許の間に悉皆準備を整へて、正月の十五日には三郎も我が今度の南洋丸に乗組んで、會社の方には後から御ゆつくりお出でなさいとも何とも言ふ必要が無いの

で言はずに錨を抜いて行つて了つた。その動作の早業は目に見合せぬやうであつた。會社では何と三郎を批難する勇氣も無く、たい恐ろしい奴だと言つた。成程恐ろしいに相違なかつた。此方では今ボツ／＼次の船員を集めて居る位であつた。

出發に臨んで三郎は、角井君と運轉手の伊勢巳之助君丈を後に殘して大阪に廻らせた。その時横濱には船の好いのが無かつたので、二人の任務はそれから大阪へ行つて先づ船を手に入れ、船員を雇ひ同時に大阪で三郎に指定せられた雜貨を仕入れて、南洋丸の後を追ふ事に極つて居つた。

二月の末に瓜哇に着いて根據地を造つた。三郎は兼ての經驗に依り最も巧妙なる方法を取つて貿易を始めた。品物はこれまでの物よりも目新しい、土人の實用にも適する、それに無智の土人を欺かぬ

やうにして、幾分づゝ先の會社の物より安くして、向ふの便利と利益をも計つたので、戦は勝つたり大繁昌、僅許の間で船は空に成つて了つた。イヤ空には成らぬ、土人の米とも見るべき椰子の實と入換つて船は又一杯満された。

この時分は未だ南洋に目を着ける人が少なかつたので、火奴を一袋やれば、土人は喜んで椰子の實を十個も寄來したものであつた。これを日本に持つて歸れば、石鹼の原料として相當な價格に捌けた。

その中に角井君と伊勢君が又第二南洋丸を仕立て、遣つて來た。待つて居りましたで三郎は、これも亦椰子の實と交換して、瓜哇の店には角井君と松島君と外に兩三名人物を見立て、殘して置いて歸つて來た。

二回目の航海から然るべき人物を十四五名選抜して向ふに廻し、此方は横濱に本店を置いて、嘗て安治川丸を下りた後、大阪で多年商業に従事して居つた田中利三郎君を支配人に置き、三郎自身は向ふに行つては販路の擴張に努め、時々此方へ歸つて來ては商品の仕入その他の指圖をして居つた。

この事業は大いに當つて、四五年の後は三郎は大資本主に成つた。イヤ三郎一人で無い、三郎の此の事業に關係した者は、皆相當の資産が出來た。世の事業界を見渡せば、事業主自身の懐はズンズ

ン脹れても、それに使はれる目下の雜輩は金も何にも有つては居らぬ。然るに三郎は然うで無い、利益を惜まず部下に分つた。それで一同三郎に雇はれて居るやうな氣持はせず、三郎の事業を直ちに自己の事業と思つて働いた。それが一つは非常に事業の榮える動力に成つて來た。

三郎は既に十分資本が出來たので、次には自分が始めて南洋諸島に日本の賣藥を廣めかつた。これが亦大當りに當つた。今日では藥の賣子丈でも五百名近く行つて居る。次に始めた眞珠の採集も馬鹿に當つた。砂金の採集にも意外の利益があつた。

その後幾多の星霜を経た今日では、土肥三郎君の全資産價格は極内輪に見ても壹千萬圓は確實である。君は愈々此處に其の本懐を果すべき時が來た。而も君の年齢は本年(大正二年)未だ僅に不惑を越えること二歳である。君は目下それ／＼専門の人を聘して、日本の本土より程遠からぬ南方の或る島を見立て、世の肺病患者の療養所を設けんとして居られる。この最初の君が慈善事業には、先づ五百萬圓を投せられるさうである。

君は長女霞子に養子をせられ、その人は今岳父の事業に従事して居られる。令息彦一氏は目下獨逸に留學して、熱心に藥物學の研究を遣つて居られる。令妹夫婦や坂本家の夫婦は申すに及ばず、君の身に幾分縁故ある人々で、君の事業に目下關係して居ない者は無い。而も皆各自に十分満足して盡し

て居らぬ者は一人も無い。  
 君は其後今日に至るまで無妻で楽しく過して居られる。今後も恐らく左様であらう。人あり妻を薦むるあれば、君は深く其の人の厚意を感謝して、後では莞爾と左も喜ばしさに笑ひ、「有がたうございますが、私には良い女房がありません、好く慰めてくれまする！」  
 答は何時此の一言に限つて居る。君には隠し妻でもあるか。否、断じてそんな者は無い。  
 然らば君の良い女房と云はれるのは何であるか。  
 世の人深く怪しむを休めよ。それは君の事業即ち慈善である。人間最上の歡樂を求めたならば、凡そ地上の世界に於いて、恐らく慈善に及ぶものはあるまい。また此處に到達して人間は、始めて眞に我等日本民族の崇拜ぶ神佛の使命を果し得たものである。

断腸記終

大正二年十二月十二日印刷  
 大正二年十二月廿一日發行

断腸記  
 正價金八拾錢

著作者 堀内文麿

發行者 伊東芳次郎  
東京市神田區鍛冶町八番地

印刷者 高橋賢治  
東京市小石川區久堅町百八番地

印刷所 博文館印刷所  
東京市小石川區久堅町百八番地



發行所 東京市神田區鍛冶町八番地  
電話本局八八四番 總機東京一七一番  
 東亞堂書房





▲修養處世立志書類

著 譯 者	書 名	冊 數	正 價	送 費
加藤咄堂先生著	修 養 論	全一冊	二 圓	十二錢
加藤咄堂先生著 大住 舜先生著	常 識 之 基 礎	全一冊	二 圓	十二錢
加藤咄堂先生著	人 格 之 養 成	全一冊	五 十 錢	八 錢
黑岩周六先生序 加藤咄堂先生著	冥 想 論 <small>附坐禪論</small>	全一冊	五 十 錢	八 錢
加藤咄堂先生著	難 感 想 朝 思 暮 想 錄	全一冊	六 十 錢	八 錢
加藤咄堂先生編	修 養 資 料 は な し 草	全一冊	四 十 錢	六 錢
澤庵禪師舊鈔 森大狂居士參訂	澤庵 老 子 講 話	全一冊	一 圓 三 十 錢	八 錢
西郷南洲翁手抄 臼田石楠先生講述	西郷 言 志 錄 講 話	全一冊	六 十 錢	六 錢

修養處世立志書類

野田靜軒先生遺著 足立栗園先生校	清語沈靜錄	後前篇 各六十錢	各六十錢	各六錢
大田錦城先生遺著 東亞堂編輯局校註	校梧窓漫筆	全一冊 六十錢	六十錢	六錢
貝原益軒先生遺著 足立栗園先生譯註	註慎思錄	前篇 六十錢	六十錢	六錢
遠藤文學博士序 祥雲文學士校訂	徂菴生論語辨	全一冊 五十錢	五十錢	六錢
澁江保先生纂譯	ソクラテス論語	全一冊 七十錢	七十錢	六錢
加藤咄堂先生著	補雄辯法	全一冊 七十錢	七十錢	八錢
加藤咄堂先生著	讀書法	全一冊 九十五錢	九十五錢	八錢
文學士 沼波瓊音先生著	始めて確信し得たる全實在	全一冊 七十錢	七十錢	八錢
堀内新泉先生著	人格と運命	全一冊 五十錢	五十錢	八錢
堀内新泉先生著	運命之改造	全一冊 六十錢	六十錢	八錢

堀内新泉先生著 大野靜方兩君畫	立志全力の人	全合一冊本 一圓四十錢	十二錢
破魔禪居士著	偉人修養史	全一冊 六十錢	八錢
德富蘇峰先生序 鹽見戈山先生著	修養偉人之風化	全一冊 五十錢	六錢
德富、加藤、大町、山路、松村五先生序 菊池、曉汀先生編	現代名士の修養百話	全一冊 六十錢	八錢
男爵後藤新平閣下序 井上泰岳先生編	現代名士の活動振り	全一冊 七十錢	八錢
加藤咄堂先生著	自警錄	全一冊 五十錢	八錢
哲學博士 シヨントッド教授原著 姫河原無鳴先生譯補	立志自修論	全一冊 六十錢	八錢
安田操一先生著	禁煙の實驗	全一冊 四十錢	六錢
足立栗園先生著	鍛鍊身氣養氣法	全一冊 五十五錢	八錢
東京血液療院 呼吸操練部顧問 熊代彦太郎先生著	自活氣術	全一冊 六十錢	八錢

修養・世立志書類

東京血液療院 呼吸操練部顧問 熊代彦太郎先生著	鍛心身 深呼吸健康法	全一冊	五十五錢	八錢
忽滑谷快天先生著	養氣練心の實驗	全一冊	八十錢	八錢
足立栗園先生著	鍛心身 靜坐内觀祕法	全一冊	七十錢	八錢
足立栗園先生著	膽力之鍊養	全一冊	五十五錢	八錢
加藤咄堂先生著	文 字 禪	全一冊	五十錢	六錢
加藤咄堂先生著	禪 學 觀	全一冊	七十五錢	八錢
大内青巒居士序 釋悟庵師著	禪 と 修 養	全一冊	五十錢	八錢
宗演禪師 無邊快居士 破覽禪師 題詞語 著	禪 と 活 動	全一冊	四十五錢	六錢
文學博士 幸田露伴先生著	潮 ま ち 草	全一冊	八十五錢	八錢
文學博士 幸田露伴先生著	努 力 論	全一冊	一圓六十錢	十二錢

渡邊、黒岩、佐々木 諸大家題序 茅原華山先生著	動 中 靜 觀	全一冊	四十錢	六錢
加藤咄堂先生立案 修養會編纂	修 養 日 記	中形	五十錢	八錢
文學士堀田相爾先生共著 神學士村田天籟先生共著	圓 滿 生 活 論	全一冊	七十錢	八錢
加藤咄堂先生著	世 態 人 情 論	全一冊	二圓三十錢	十二錢
心身健康會長 檜山鐵心著	頭腦 明快 記憶力增進法	全一冊	四十五錢	六錢
醫學士木村謙太郎先生校園 漆山又四郎先生著	腦 力 養 成 法	全一冊	五十錢	六錢
福本日南先生著	英 雄 論	全一冊	一圓	八錢
加藤咄堂先生著	靖 獻 遺 言 講 話	全一冊	(近刊)	
加藤咄堂先生編	教國民 資 料 大 鑑	全一冊	(近刊)	
巖谷小波先生共著 加藤咄堂先生著	通俗 講 常 識 大 鑑	全一冊	(近刊)	

宮澤柳政太郎先生序  
大塚正先生著  
藤田大佐藤正先生著

日本人長所短所論

全二冊 一圓四十錢 十二錢

▲歷史傳記偉人研究書類

著者	書名	冊數	正價	送料
法學博士 寬克彦先生序 文學士 中村德五郎先生著	我等之祖先	全一冊	一圓二十錢	八錢
白柳秀湖先生著	大日本閩門史	全一冊	二圓五十錢	十二錢
文學士 煙山專太郎先生著	西洋文明史	全一冊	一圓六十錢	十二錢
中澤臨川先生著	トルストイ	全一冊	一圓三十錢	十二錢
破魔禪居士著	偉人修養史	全一冊	六十錢	八錢
德富蘇峯先生序 鹽見戈山先生著	逸修話 偉人之風化	全一冊	五十錢	六錢

山路愛山先生著	武家時代史論	全一冊	六圓十錢	八錢
茅原華山先生著	世界文明推移史論	全一冊	五十錢	八錢
山路愛山先生著	勝海舟	全一冊	九圓十錢	八錢
福本日南先生著	直江山城守	全一冊	一圓二十錢	八錢
幸田露伴先生著 阪井紅兒先生畫	賴朝	全一冊	一圓十錢	八錢
碧瑠璃園先生著	由比正雪	後前 精篇	一圓三十錢	各八錢
碧瑠璃園先生著	山鹿素行	全一冊	八圓十錢	八錢
小杉天外先生著 坂井紅兒先生畫	伊豆の賴朝	後前 精篇	一圓三十錢	十八錢
文學士 幸田成友先生著	大鹽平八郎	全一冊	一圓五十錢	十二錢
故昆尼薩塞藤師校閱 青山露村先生著	深草の元政	全一冊	七十錢	八錢

足立栗園先生著	古英雄の生活觀	全一冊	三十錢	四錢
伊藤痴遊先生著	快傑傳	第一第二第三	各一圓	各八錢
伊藤痴遊先生著	陸奥宗光	續正編	各九十五錢	各八錢
和田天華先生著	坂本龍馬	全一冊	一圓十錢	十二錢
山路愛山先生著	佐久間象山	全一冊	九十五錢	八錢
藤田長江先生編	福澤翁言行錄	全一冊	三十五錢	四錢
白田石楠先生著	西郷南洲言行錄	全一冊	六十錢	八錢
福本日南先生序 伊藤痴遊先生著	西郷南洲(分本)	正篇	九十五錢	八錢
長谷場純孝先生序 伊藤痴遊先生著	西郷南洲(分本)	續篇	九十五錢	八錢
長谷場純孝先生序 伊藤痴遊先生著	西郷南洲(分本)	終篇	一圓二十錢	八錢

伊藤痴遊先生著	後の西郷南洲	全一冊	一圓二十錢	八錢
伊藤痴遊先生著	後の西郷南洲(完編)	全一冊	一圓四十錢	十二錢
長谷場福本兩先生序 伊藤痴遊先生著	西郷南洲(合本)	全三冊	六圓五十錢	廿四錢
伊藤痴遊先生著	西郷南洲外篇(僧月照)	全一冊	六十五錢	六錢
福本日南先生著	黒田如水	全一冊	一圓五十錢	十二錢
文學士 白河鯉洋先生著	孔子	全一冊	一圓二十錢	十二錢
陸軍歩兵中尉 安川隆治君著	(賜天覽)血煙	全一冊	一圓	八錢
ハリスン氏原著 陸軍歩兵大尉 費田江東先生共譯	日露の再戰	全一冊	一圓二十錢	八錢
東洋協會員 本間徳次郎君著	血戰	全一冊	八十五錢	十二錢
小金井蘆洲師口演	堀部安兵衛	全一冊	三十錢	四錢



中野耕堂先生著	七 擒 八 縱 與ふる書十篇	全一册	七 十 錢	六 錢
早稻田大學講師 米國法學博士 吉田公重先生編	米國十大偉人	全一册	五 十 錢	六 錢
鹿野千代夫先生編	乃木大將言行錄	全一册	一圓五十錢	十二錢
コナン Doyle 原著 文士岡本日亭先生譯補	史外ナポレオン奇譚	全一册	九 十 錢	八 錢
文學士 栗原古城先生譯	ソニー偉人論講話	全一册	一圓五十錢	十二錢
山路愛山先生著	岩崎彌太郎	全一册	(近刊)	
學堂尾崎行雄序、法學博士清水瀧序、高橋淡木先生著	明治史 日本新英傑傳	全一册	二圓二十錢	十二錢

二三

▲小説・文藝詩集書類

文學博士 幸田露伴先生校訂解題

日本文藝叢書

定價壹册 貳拾錢均一 (送費一册四錢 五册迄八錢)

全二百卷博  
文館印刷所  
新鑄六號活  
字使用印刷

(1) 椿説弓張月	(2) 通俗三國誌	(3) 椿説弓張月	(4) 東海道中膝栗毛	(5) 通俗三國誌	(6) 近松三國集	(7) 椿説弓張月	(8) 太通俗三國集	(9) 太通俗三國集
(10) 東海道中膝栗毛	(11) 通俗三國誌	(12) 西鶴三國集	(13) 太通俗三國集	(14) 其奇客傳	(15) 通俗三國集	(16) 太通俗三國集	(17) 太通俗三國集	(18) 一休諸國物語
(上)	(中)	(前)	(前)	(上)	(上)	(上)	(上)	(全)

小説・文藝・詩集書類

一三

和 田 天 華 先 生 著	伊 藤 痴 遊 先 生 著	伊 藤 痴 遊 先 生 著	伊 藤 痴 遊 先 生 著	長谷 島 文 部 大 臣 閣 下 先 生 著 及 長 谷 島 文 部 大 臣 閣 下 先 生 著 伊 藤 痴 遊 先 生 著	林 董 閣 下 題 字 伊 藤 痴 遊 先 生 著	山 路 愛 山 先 生 著	小 杉 天 外 先 生 著	碧 瑠 璃 園 先 生 著	碧 瑠 璃 園 先 生 著
坂 本 龍 馬	西 郷 南 洲 外 篇	後 の 西 郷 南 洲	後 の 西 郷 南 洲	(賜 天 覽) 西 郷 南 洲	陸 奥 宗 光	佐 久 間 象 山	伊 豆 の 頼 朝	山 鹿 素 行	由 比 正 雪
全 一 冊	全 一 冊	完 編	全 一 冊	終 編 正 編	後 正 編	全 一 冊	後 前 篇	全 一 冊	後 前 篇
一 圓 十 錢	六 十 五 錢	一 圓 四 十 錢	一 圓 二 十 錢	一 圓 十 五 錢	九 十 五 錢	九 十 五 錢	一 圓 三 十 錢	八 十 錢	一 圓 三 十 錢
八 錢	六 錢	十 二 錢	八 錢	各 八 錢	各 八 錢	八 錢	十 八 錢	八 錢	各 八 錢

《錄目刊既》

(35)	(34)	(33)	(32)	(31)	(30)	(29)	(28)	(27)	(26)	(25)	(24)	(23)	(22)	(21)	(20)	(19)
い ろ は 文 庫	い ろ は 文 庫	馬 琴 佳 作 集	通 俗 三 國 誌	八 笑 國 語 人	邯 鄲 諸 國 物 語	邯 鄲 諸 國 物 語	續 大 岡 政 談	通 俗 三 國 談	大 岡 政 談	通 俗 三 國 談	太 平 記	浮 世 床	驚 奇 俠 傳	通 俗 三 國 誌	浮 世 風 呂	驚 奇 俠 傳
(後)	(前)	(一)	(八)	(全)	(後)	(前)	(全)	(七)	(全)	(六)	(五)	(全)	(下)	(五)	(全)	(中)
(53)	(52)	(50)	(48)	(47)	(46)	(45)	(44)	(43)	(42)	(41)	(39)	(38)	(37)			
漢 楚 軍 談	七 月 物 語	雨 舍 源 氏	田 舍 源 氏	田 舍 源 氏	田 舍 源 氏	田 舍 源 氏	水 滸 傳	保 元 平 治 物 語	水 滸 傳	枕 草 紙 つ れ ぐ 草	水 滸 傳	平 家 物 語	平 家 物 語			
(前)	(全)	(全)	(四)	(三)	(三)	(二)	(三)	(全)	(三)	(全)	(二)	(一)	(後)	(前)		





文學士 勝屋錦村先生譯	堀内新泉先生著 小立志 全一冊	堀内新泉先生著 小立志 全一冊	堀内新泉先生著 小立志 全一冊	大和田建樹先生著 全一冊	大和田建樹先生著 全一冊	大和田建樹先生著 全一冊	長谷部湘雨先生著 全一冊	文學博士 幸田露伴先生著 全一冊	文學博士 幸田露伴先生著 全一冊	幸田露伴先生著 全一冊	沼田穎川先生註 全一冊	高濱虛子先生編 全一冊
社界主義が實行 <small>なられた</small>	力の人	能謠秘訣	謠曲手ほどき	バツドボーイ	潮まち草 <small>附 土偶木偶</small>	小はるさめ集	二日物がたり	新寫生文				
全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊
六十錢	一圓四十錢	一圓十錢	九十錢	五十錢	八十五錢	七十五錢	四十錢	五十錢	五十錢	四十錢	四十錢	八十錢
六錢	十二錢	八錢	八錢	六錢	八錢	八錢	四錢	八錢	四錢	四錢	四錢	八錢

山口小太郎先生序 秋元蘆風先生著 フランク・ヴェキント著 文學士 野上白川先生譯	シムレ ル研究 鐘の歌評釋	全一冊	七十錢	四錢
春の目ざめ	全一冊	(近刊)		
動中靜觀	全一冊	四十錢	六錢	

▲隨筆・文集・感想録書類

著者  
渡邊國武下野縣 黒岩周六先生  
佐々木信綱先生  
茅原華山先生著

書名  
動中靜觀

冊數  
全一冊

正價  
四十錢

送料  
六錢

萬朝報記者 茅原華山先生著	新動中靜觀	全一冊	九十五錢	八錢
茅原華山先生著	地人論	全一冊	九十錢	八錢
茅原華山先生著	世界文明推移史論	全一冊	五十錢	八錢
文學博士 中島力造先生著	歐米感想錄	全一冊	八十錢	六錢
福本日南先生序 小川柳坡先生著	支那及支那人	全一冊	八十錢	八錢
加藤咄堂先生著	朝思暮想錄	全一冊	七十錢	八錢
鴉崎鷺城先生著	閩人と黨人	全一冊	一圓	八錢
鴉崎鷺城先生著	活人劔・殺人劔	全一冊	一圓	八錢
文學博士 幸田露伴先生著	潮まち草 附土偶木偶	全一冊	八十五錢	八錢
文學博士 幸田露伴先生著	小はるさめ集	全一冊	七十五錢	八錢

二〇

幸田露伴先生註 沼田穎川先生註	註二一日物がたり	全一冊	四十錢	四錢
楓村居士先生著	小英雄 俠雄錄	全一冊	六十錢	八錢
高濱虛子先生編	新寫生文	全一冊	五十錢	八錢
山口小太郎先生序 秋元蘆風先生著	シルレ ル研究 鐘の歌評釋	全一冊	七十錢	四錢
中野耕堂先生著	七擒八縱 與ふる書十篇	全一冊	七十錢	六錢
青風白雨樓主人著	お医者論	全一冊	七十錢	八錢
文學士 沼波瓊音先生著	大疑の前	全一冊	七十錢	六錢
文學士補永蘇人、同長沼賢共 海、同佐野保太郎、同藤士加共 藤鐵之助、同古瀬安後著	通俗話 夏の天地	全一冊	一圓	八錢
龜谷天尊先生著	(賜天覽) 瑤琴	全一冊	四十五錢	六錢
黑法師先生著	大秘密 美人探檢	全一冊	一圓四十錢	十二錢

隨筆・文集・感想録書類

二二

德富蘆花先生序 角田浩々歌客先生著	時文 理趣 情景	全一册	四	十錢	六錢
文學士 沼波瓊音先生著	默想の天地	全一册	四	十八錢	六錢
文學士 沼波瓊音先生著	徒然草新釋	全一册	(近)	刊	
幸田文學博士 校訂、解題、評說	日本文藝叢書	正輯百册 續輯百册	並製一册三十錢 特製一册三十錢		各册四錢 五册六錢
矢野文雄先生著	龍溪隨筆	全一册	五	十錢	六錢
福本日南先生著	日南集	全一册	二	圓	十二錢
文學士 安倍能成先生著	予の世界	全一册	(近)	刊	
岩野泡鳴先生著	近代思想と實生活	全一册	(近)	刊	

▲地理・紀行書類

文學博士 三宅雄二郎先生序 山岡光太郎先生著	世界アラビヤ縦斷記	全一册	九	十錢	八錢
江原素六翁、矢野文雄、 坪内逍遙、徳富蘇峰序 角田浩々、歌客先生著	漫遊人國記	全一册	三	圓	十六錢
文學博士 中島力造先生著	歐米感想錄	全一册	八	十錢	六錢
福本日南先生序 小川柳坡先生著	支那及支那人	全一册	八	十錢	八錢
探險者安西政次郎先生述 聞記者長井修吉先生編	アラスカ大探險金と運	全一册	三	十五錢	四錢

著譯者		書名	冊數	正價	送料
文學士 沼波瓊音先生著		芭蕉句選講話	春之卷 六	十錢	六錢
幸田露伴先生序 笹川臨風先生編 沼波文學士	模範名家	俳句大成	全一冊	一圓二十錢	八錢
佐々醒雪先生序 沼波文學士著		俳句講話	全一冊	四	十錢 六錢

▲俳諧和歌漢詩書類

久保天隨先生序 沼波文學士著	俳句研究	全一冊	四	十錢	六錢
沼波文學士著	俳句階梯	全一冊	三	十錢	四錢
三宅嘯山師遺著 沼波文學士校訂	俳諧古選新選	全一冊	四	十錢	六錢
沼波文學士校閱 宮垣四海先生著	俳味禪味	全一冊	三	十錢	四錢
武島羽衣先生序 志賀華山先生著	和歌作法	全一冊	三	十錢	四錢
文學士 尾上柴舟先生述	新和歌講話	全一冊	(近刊)		
町田柳塘僊史著	正訂漢詩講話	全一冊	五	十錢	六錢

▲作文國語文書類

著者	書名	冊數	正價	送料
佐藤仁之助先生著	速成漢學捷徑	全一冊	一圓二十錢	十二錢
佐藤仁之助先生著	國語漢文要語詳解	漢國語部	各四十錢	各八錢
佐藤仁之助先生著	受驗日本文法解義	全一冊	四十五錢	六錢
文學士 大町桂月先生著	作文法講話	全一冊	三十錢	四錢
佐藤仁之助先生著	漢字異同辨及用法	全一冊	二十錢	二錢
佐藤仁之助先生立案	假字用法及誤動詞語尾表	全一冊	六錢	二錢
文學士 沼波瓊音先生著	新書翰文大全	全一冊	一圓二十錢	十二錢

▲漢籍複刻書類

著者	書名	冊數	正價	送料
澤庵禪師細抄 森大狂居士嚴訂	澤庵老子講話	全一冊	一圓三十錢	八錢
佐藤一齋先生遺著 西鄉南洲翁手抄	南洲言志錄講話	全一冊	六十錢	六錢
遠藤文學士校訂 祥雲文學士校訂	徂徠論語辨	全一冊	五十錢	六錢
野靜軒先生遺著 幸田露伴先生遺著	清語沈靜錄	前後篇	各六十錢	各六錢
加藤咄堂先生著	靖獻遺言講話	全一冊	(近刊)	

▲語學書類

著譯者	書名	冊數	正價	送料
丁按コトベシ、大野教授 エスベル、博士著 在大野博士 前田太郎先生譯述 文學士	語學教授法新論	全一冊	一圓三十錢	十二錢
若月保治先生編	註英語練習ノ一ト	全一冊	四十八錢	四錢
東京高等師範學校講師 戸川秋骨先生著	英文學講話	全一冊	三十五錢	六錢
山口少太郎先生序 秋元蘆風先生著	鐘の歌評釋 ル研究	全一冊	七十錢	四錢

清國張廷彦先生校閱  
張誠、隨先生合著  
宮澤文次郎

▲東語速成篇

著譯者	書名	冊數	正價	送料
同	東語速成篇	全一冊	十五錢	二錢
▲宗教・哲學書類				
ルドルフ、オイクン原著 文學士安倍能成先生譯	大思想家の人生觀	全一冊	三圓五十錢	十六錢

語學書類・宗教・哲學書類

文學博士 桑木殿翼先生著	文學士 沼波瓊音先生著	文學士 沼波瓊音先生述	篠原無然郎先生著	大内青巒居士序 釋悟庵師著	宗演禪師、無邊快禪題詞 破覽禪居士著	黑岩周六先生序 加藤咄堂先生著	加藤咄堂先生著	加藤咄堂先生著	足立栗園先生著
哲學綱要	大疑の前提	容貌と人格	容 貌 と 人 格	禪 と 修 養	禪 と 活 動	補增冥想論附坐禪論	文 字 禪	禪 學 觀	鍛心身 練 靜坐内觀祕法
全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊
一圓八十錢	七十一錢	九十五錢	九十五錢	五十一錢	四十五錢	五十一錢	五十一錢	七十五錢	七十一錢
十二錢	六錢	八錢	八錢	八錢	六錢	八錢	六錢	八錢	八錢

青柳有美先生著	東洋大學教授 境野黃洋先生著	文學士 岡本清逸先生著	加藤咄堂先生校註	文學士 加藤咄堂先生著	加藤咄堂先生著	加藤咄堂先生著	加藤咄堂先生著	加藤咄堂先生著	加藤咄堂先生著
性 慾 哲 學	法 華 物 語	神通力の研究	神 通 力 の 研 究	神 通 力 の 研 究	神 通 力 の 研 究	神 通 力 の 研 究	神 通 力 の 研 究	神 通 力 の 研 究	神 通 力 の 研 究
全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊
一圓二十錢	八十五錢	九十一錢	九十一錢	九十一錢	九十一錢	九十一錢	九十一錢	九十一錢	九十一錢
八錢	八錢	八錢	八錢	八錢	八錢	八錢	八錢	八錢	八錢





陸軍一等軍醫 音尾博士先生著	家庭醫典	全一冊	二圓七十錢	十六錢
陸軍一等軍醫 音尾博士先生著	祕密病の新療法	全一冊	三十錢	四錢
中野時一郎先生著	旅行の衛生	全一冊	七十五錢	八錢
工學士 中島德太郎先生著	化學廢物利用	全一冊	一圓二十錢	八錢
赤堀峯吉先生共著 赤堀菊子先生共著	和洋簡易料理	全一冊	一圓三十錢	八錢
加藤咄堂先生著	補修養論	全一冊	二圓	十二錢
加藤咄堂先生著 大住舜牙先生著	常識之基礎	全一冊	二圓	十二錢
文學博士 幸田露伴先生著	努力論	全一冊	一圓六十錢	十二錢
東京血液療院 呼吸操練部顧問 熊代彦太郎先生著	自活氣合術	全一冊	六圓十錢	八錢
足立栗園先生著	膽力之鍊養	全一冊	五十五錢	八錢

大内青巒居士序 釋悟庵師著	禪と修養	全一冊	五十錢	八錢
宗演禪師題詞 無遠居士著	禪と活動	全一冊	四十五錢	六錢
東京血液療院 呼吸操練部顧問 熊代彦太郎先生著	鍛鍊身深呼吸健康法	全一冊	五十五錢	八錢
忽滑谷快天先生著	養氣鍊心の實驗	全一冊	八十錢	八錢
足立栗園先生著	鍛鍊身養氣法	全一冊	五十五錢	八錢
木村醫學士校閱 漆山又四郎先生著	腦力養成法	全一冊	五十錢	六錢
加藤咄堂先生序 本多五陵先生著	健康秩序朝起の勧め	全一冊	三十五錢	四錢
大場健兒先生著	どもり矯正の實驗	全一冊	二十五錢	四錢
安田操一先生著	禁煙の實驗	全一冊	四十五錢	六錢
大日本催眠學會長 小野福平先生著	催眠術治療精義	全一冊	九十錢	八錢



329  
192

發行所

東京市神田區  
鍋町九番地

東紅書院

三八

文學士 煙山專太郎先生著	英雄豪傑論	全一冊	一圓六十錢	十二錢
加藤教榮先生編	諸名家の 乃木大將觀	全一冊	六十錢	六錢
一條忠衛先生著	蜜月日記	全一冊	九十錢	八錢
石川巖先生著	四代男物語	全一冊	七十錢	八錢
桑野桃華先生著	海魔王	全一冊	五十五錢	六錢
押川春浪先生序 平塚斷水先生著	破天荒 大怪賊ジゴマ少年	全一冊	四十五錢	六錢

手賣捌元

東京市神田區  
鍛冶町八番地

東亞堂書房

15

8.7.25



15

329  
192

終

